私の姉が肉食系だった件

ナツイロ

【注意事項】

このＰＤＦファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にＰＤＦ化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でＰＤＦファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

サンダースとの一戦が終わってから直ぐのこと、みほは姉のまほから一本の電話を受ける。

まほ「彼をホテルに誘いたいんだが」

みほ「お姉ちゃんっ!?」

だいたいこんな話です。

※まほルート、完結しました。

※みほルート、投稿しました。

目次

本編　まほ姐さんルート
私の姉が肉食系だった件 ―――― 1
私の姉が肉食系だった件・続き 25
私の姉が肉食系だった件・続き　その2 ―――― 46
私の姉が肉食系だった件・劇場版 68
ＩＦルート　みほ編
ＩＦルート　みほ編 ―――― 141

本編　まほ姐さんルート
私の姉が肉食系だった件

私の名前は西住みほ、大洗女子学園に通う高校二年生だ。
勝利だけを追求する戦車道が嫌になり、熊本の黒森峰女学園から転校して来たのだが、なんやかんやあって結局また、戦車道に関わっている。
今では友人にも恵まれ、以前の様にただ義務感からやっていた戦車道が、ここに来てからは楽しいものと思える様になったので、戦車道の大家であり西住流の師範である母や後継者の姉には悪いが、転校して良かったと思っている。
このままいつか、自分の戦車道を見つけられるかもしれない。
そう思えるようになり、日々充実した高校生活を送っている。
私が所属している戦車道チームは、つい先日の全国大会一回戦で強豪校でもあるサンダースを相手に、ギリギリの所で勝利を収めた。
サンダースのケイ隊長のスポーツマンシップに助けられた形だったが、チームメイト達は素直に勝利を喜んでいた。
はっきり言って、誰も大洗の勝利を期待していなかったところに、この大番狂わせだ。

学園艦の住人たちも、にわかに浮ついている気がする。
二十年ぶりの戦車道復活に、この大金星だ。
仕方ない面もあるだろう。
二回戦の相手はもうそろそろ決まるはずだが、どこが相手だろうとウチのチームからすれば全て格上の相手になるのは間違いない。
作戦次第で勝てる相手ならば良いのだが……。
特徴的な電子音が、カバンから聞こえて来た。
携帯電話がなっている。誰だろうか？
携帯を取り出して、ぱかりと開く。
私は目を疑った。姉からの電話だった。
どうして？
先日、試合後に友人の麻子さん達をヘリで送ってもらった時には、まともに会話もなかったというのに。
震える手で通話ボタンを押す。
「も、もしもし？」
『みほ、私だ』
「うん、お姉ちゃん。久しぶり」

『先日会ったばかりだ、久しぶりというわけでもないさ』
「それはそうだけど、殆ど話さなかったし」
『……それも、そうだな』
ふいに、会話が途切れる。
突然の電話で、何を話題にすれば良いのか、私は分からず言葉が続かなかったのだが、姉の方もどうやら何かを逡巡している様子。
数秒の沈黙の後、意を決したように、私に問いかけてきた。
『彼の連絡先を教えてくれ』
彼ってどれ？
いや、誰？
そもそも彼と言うからには男性ということで、姉の口振りからすれば私はその彼の連絡先を知っているらしい。
いやいやいや、私には彼と呼び合うような知り合いはいないし、彼という表現はつまりその、そういう関係を暗示しているわけで。
「わ、わたし彼氏なんかいないよぉっ！」
つい言葉が上擦ってしまい、誰かに聞かれていないか周囲を見回してしまった。
幸い、周囲にひと気はなかった。

くっそ、こんなことで辱めを受けるなんて。
『誰も、みほの彼氏の話なんてしていないぞ』
「だ、だから！　私には彼氏なんて……」
『彼というのは、先日私を学園艦に案内してくれた男子生徒の事だ』
「へ？」
『私より頭一つ分くらい背が高く、体を程々に鍛えていて、気遣いができ、髪を変に染めたりせず短髪で、カレーが好きな、あの彼だ』
「背が高い以外の情報は、別にいらなかったなぁ……」
『何か言ったか』
「んーん、別に」
ため息が漏れるのを、私は止められなかった。
姉の言う彼とは、恐らく、というよりほぼ間違いなくあの人だろう。
小野忠勝。
何か、トンボを切ってそうな名前だが、大洗女子学園の男子分校に通う、高校三年生だ。
戦車道チームの裏方として参加してくれていて、自動車部に混ざって戦車の整備や演習場の造成、試合会場に戦車を運搬する際の車輌の運転などもしてくれる、痒い所に手

が届く、そんな先輩だ。
大洗女子学園艦にも、学園艦生まれの学園艦育ちという生徒が一定数いる。
これはどの学園艦でも同じなのだが、学園艦生まれの児童は陸の小学校には通えない。
幼い子供が親元を離れられないとされるのは、陸も学園艦も変わらないのだ。
そういった児童は大抵の場合、中学校に上がる段階でそのまま学園艦の中等部進学するか、大洗女子のような女子校の学園艦の男子児童は、他の学園艦の学校に進学する。
しかしながら、事情があって親元を離れることが困難な児童生徒という者が存在する。
そのような生徒向けの学校として、女子学園艦であっても、男子生徒が通う分校として教育施設が存在するのだ。
そして、少数クラスである利点を利用して、学園艦外からも事情を抱えた生徒を受け入れる事もある。
姉の言う彼も、事情を抱えていた一人だったようで、高校に上がると同時にこの学園艦にやって来た、らしい。
らしいというのは、他人から聞いた話であり、話してくれた人は生徒会長の角谷会長だからだ。

プライベートな内容なので、聞く事は憚れたのだが、これからちょくちょく顔を合わせるのだからと、押し切られてしまった。

それはともかく。

「お姉ちゃんが言ってるのは、小野先輩のこと？」

というか、姉を相手に物怖じせず、角谷会長が学園艦の案内を任せる男子生徒と言ったら、彼しかいないのだが。

「三年生で、男子生徒で唯一生徒会に参加してて、戦車道チームに参加してる？」

『あぁ、食事の時、確かそう言っていた気がする』

食事ってなに。

いや待て、確かあの日は姉を乗せて帰るはずだったヘリを麻子さんの為に動かして貰ったので、姉はヘリが戻ってくるまで大洗女子学園で待っていて貰ったと、会長が言っていた。

しかし、会長がずっと姉についている訳にもいかず、同じ生徒会で戦車道チームの一員でもある小野先輩に姉の相手を任せたのではないだろうか。

接点としたら、そう考える他に思いつく物がない。

十中八九、その時に夕食を共にしたのだろう。

生徒会室の入っている艦橋近くには、それなりにお食事処がある。

無理のある推測でも無いはずだ。
「ちなみに、ご飯は何を食べたの？」
『カレーだが』
「やっぱり」
姉はあれでも、中々のカレー好きなのだ。
姉が惚れっぽい性格だとは思わないが、食事のチョイスはポイントが高かったのだと予想はつく。
小野先輩はイケメンというほど、容姿が整っているとは言わないが、あれで中々人好きのする笑顔の持ち主なのだ。
友人の沙織さんの調べでは、そこそこの人気があるのだとか。
確かに、後輩の面倒見は良いと思う。
男子分校の生徒は、偶に不良っぽい生徒が入ってくるらしいのだが、小野先輩の言葉には絶対従うようで、不良少年達からは恐れと尊敬を集めているとかいないとか。
沙織さん、一体どこからそんな情報を？
いや、沙織さんではなく、今は姉の事だ。
姉の口振りから察するに、あの姉にしてはかなりの高評価を下しているようだが、まだ小野先輩のことを好きかどうかというのは明言していない。

ここまで来て、ただお礼を言う為だけに連絡先を聞いて来たのだったら、私の独り相撲で終わってしまうのだが。

「ね、ねぇお姉ちゃん。一応聞くんだけど、小野先輩の連絡先が知りたいのって」

『先日の、お礼をしたいからだ』

ふう、どうやら私の取り越し苦労だったらしい。

全く、変な冷や汗をかいてしまったではないか。

『それと、だな……』

待て、まだ続きがあるだと。

しかも、なんだか言いづらそうにしている。

これはもしや、もしかするのか？

『どうやら私は、彼に恋をしてしまったらしい』

なんでそぎゃんこつになっとっと？

いや、失礼。つい地元の方言が出てしまった。

あの、姉が恋をした？

妹の私から見ても、そういうことに奥手に見える、あの姉が？

こういうと、私が積極的かのように思われるかもしれないが、私自身も奥手なのは自覚している。

しかし、姉はそれに加えて、西住流を体言するような人物でもあるのだ。
奥手で、堅物で、西住流も付いてくる。
はっきり言って、こういう性質の話題は私の方が先だと思っていた。
何だか、とってもちくしょう。
大体、小野先輩ならどちらかと言うと、私の方が恋をするポジションとしては妥当なのではないか。
失意の内に転校してきた女子生徒、またしても戦車道に関わる中それを支える男子生徒に淡い恋心を抱く、なんて。
別に、私は小野先輩に対して恋愛感情を持っているわけではないが、私の方がまだ可能性のある立ち位置にいるシチュエーションでしょうが。
戦車道全国大会を通じて距離が縮まる二人、なんてアニメで言ったら二クール分くらいにはなりそうなもの。
そして最後は辛くも奇跡的な勝利から優勝を収め、私は彼に告白をするのだ。
それを彼は受け入れて、二人の顔が近づいていく……。そしてエンディングだ。
いいじゃないか。
スポ根と恋愛を絡めたベタな展開だが、私は嫌いじゃない。嫌いじゃないですよ。
特にモデルが私な所とか、高評価だ。

特別協賛で、ボコが関わっているならもっと良い。
後日談として、デート風景などをＯＶＡで出してくれたら完璧だ。
私なら円盤をボックスで買うね、間違いない。
『みほ、聞いているのか』
「あ、うん。ごめん。聞いてるよ」
いけない、今は私ではなく姉の恋路のことだった。
小野先輩の連絡先を聞きたいとのことだが、いくら私の身内が相手とはいえ、そう簡単に他人の連絡先を吹聴するのは憚れる。
一度、先輩の了解をとるというのが筋だろう。
まぁ、私の予想では断られる事は無いと思う。基本的に大らかな人だし、小野先輩は。
「一度、小野先輩に聞いてみるよ。お姉ちゃんに連絡先教えていいか」
『頼む、他に頼れる相手がいないんだ』
「う、うん。任せて？　それじゃ、また連絡するね。バイバイ」
『あぁ、失礼する』
ピッと、電話を切る。
姉は随分前のめりな気がするが、私の気のせいだろうか。
それはともかく、先輩に了解を取る必要がある。

何だか、私の方が緊張してきた。

今の時間帯なら、小野先輩はガレージで戦車の整備を自動車部と共に行っているはずだ。

確か、換えの装甲板が今日大洗の鉄工所から届くと聞いているので、その交換作業に追われているだろう。

私は何となく申し訳ない気持ちになりながらも、チーム全員の連絡先を登録してある携帯の電話帳を開き、小野先輩の番号を選んで発信ボタンを押した。

数度の呼び出し音の後、電話が繋がる。

「もしもし？　小野先輩、今大丈夫ですか？」

『どうした、西住隊長。戦車の整備はまだまだかかるから、練習は無理だぞー』

「いえ、戦車の話ではなくてですね」

『んー？　ちょっと待って。みんなー！　電話きたから少し離れるっ！』

電話口を塞いだのだろうが、周囲の騒音に負けないように張り上げた声は伝わってきた。

そして、了解の返事も聞こえてくる。

ナカジマさん達だろう。

騒音が遠のいて行くのを感じ、小野先輩が再び電話に出た。

『それで、何か用だった？』
「はい、えーと。その、私のお姉ちゃんの事、覚えてますか？　先日の」
『あぁ、冷泉さんの件でお世話になった、黒森峰の隊長さんだろ？　覚えてるよ』
「ええ、そのお姉ちゃんが先日の食事などの件で、お礼がしたいらしくて」
『いや、お礼するのはこっちの方でしょ。別に、気にしなくてもいいよ』
「お姉ちゃん、その辺りのこと結構きっちりやるタイプでして」
『真面目そうな感じなのは分かる』
「それで、お姉ちゃんから先輩の連絡先を聞かれまして。教えちゃってもいいですか？　本人が直接お礼がしたいと言ってるんですよ」
『んー、西住隊長のお姉さんなら、変な風に使ったりしないだろうし。いいよ、教えちゃって』
「分かりました、ありがとうございます。後から、お姉ちゃんから連絡が行くと思いますので」
『はいはい、了解。それじゃ、隊長、お疲れー』
「はい、それでは失礼します」
　ふふふ、我ながら上手いことやれた気がする。
　というより、これ以上を求められても困るのだ。

早速、成果を姉に伝えることにしよう。
先輩の電話番号と、メールアドレスをメールで送った。
数分もしない内に、姉からまた電話がかかってきた。
早すぎないかと思わないでもないが、恋する相手の連絡先が手に入るとなれば、私も似たような行動をするかもしれない。
きっとドキドキして、携帯を手放せないだろうなぁ。
『みほ、メールを見た。ありがとう』
「うん、お姉ちゃんなら信用できるからって」
『これから彼に、連絡を入れるとしよう。みほ、また電話する』
「う、うん。頑張ってね？　お姉ちゃん」
『あぁ。健闘を祈ってくれ』
電話が切れた。
不安だ、姉はもう少し慎重に行動するタイプだと思っていたのだが、恋は人を変えるのだろうか。
まぁいいか、もう私の手を離れたのだ。
後は、高みの見物と洒落込もうじゃないか。
ふふふ、まさかあの姉が恋に落ちたとは。

これは今から、連絡が楽しみである。

姉からの連絡は予想以上に早く、その日の夜になってからだった。

その頃には二回戦の相手がアンツィオ高校と決まったので、アンツィオ高校の運用戦車などを調べていたのだが、そこに姉からの電話が来たのだ。

私は、もう来たかと若干早い気がしていたものの、私とて女子高生の端くれ。

他人の恋バナは、大好物だ。

作戦ノートをたたみ、ベッドにあるボコのぬいぐるみを抱えて、姉からの電話に出る。

「もしもし、お姉ちゃん？」

『私だ、みほ』

「それで、小野先輩とはどうだったの？」

『あぁ、お礼を伝えて、会う約束を取り付けた』

ちょっと、展開早くないですかね。

「い、いつ、会うことにしたの？」

『今度の大洗の二回戦、アンツィオ高校とだったろう？　そこに偵察に行くことになっているから、その試合後に会うことにした』

「そ、そう、なんだ。あはは」

何がそこまで姉を駆り立てるのか、いや、間違いなく恋してるからなんだろうが、ここまで人を積極的にさせるのか。

私にそこまでの経験は無いが、そういうものなのだろうか。

沙織さんなら、『そうだよっ！』と鼻息を荒くするかもしれない。

しかし、小野先輩もよくオッケーを出したものである。

彼は、薄々気が付いているのか？

姉の気持ちに。

……いや、どちらかと言えば『律儀だなぁ』と思っている可能性が高いか。

小野先輩は人から好かれるタイプだが、異性にモテるかというと、少し失礼かもしれないが首をひねるところだ。

私が嫌いだというのではなく、先輩は私から見ても好ましい部類の男子生徒だが、如何せん周囲にいるのは女子高生。

判断基準が、基本的に顔面偏差値な年頃で、先輩は篩い落とされてしまうタイプなのだ。

だからこそ、姉が彼に恋したのは、つまり顔より中身で選んだわけで。

私だって、容姿が良くても中身がチャラ男では願い下げである。

その点は、姉に同意できるだろう。姉の見る目が確かで、妹の私も鼻高々だ。

小野先輩の良いところは、見た目だけでは分からないのだ。
いや別に、彼の見てくれが悪いと言っているのではなく……。
あぁ、私は一体誰に言い訳しているのか。
これでは、まるで私まで先輩に恋をしているみたいだ。
そう、私で無く姉の話。姉の話だ。
私では無いぞ、大事なことだ。
もう一度言うぞ、私ではない。
『それで、みほに相談があるんだが……』
「な、何かな？　流石に、小野先輩の好みのタイプとかは知らないからね」
『それはいい、私に振り向かせれば良いだけだ』
我が姉ながら、男前すぎる。
そんなんだから、同性からバレンタインチョコを段ボール箱でもらうのだ。
偶にだが、性別を間違えて生まれてきたんだなと、思うことがある。
例えば、今みたいな時に。
男だったら、かなりのイケメンだったろうに。
「それで……相談って？」
『あぁ、試合会場の近くにホテルが――』

「ねぇ待って、ちょっとタイム。ストップ、カメラ止めて」
『カメラなんて無いが？』
「お姉ちゃん、ちょっと黙ってて」
『わ、分かった……（何を怒ってるんだ？）』
どういうこと？
ホテル？
火照るのは私の方だよ、ってうるせーよ。
そうじゃない、ホテルだ。
恋愛初心者の私だって、それは段階飛ばしすぎだろって分かる。
階段登ってたら、ロケットに点火してたってぐらい飛ばしすぎ。
何言ってんだ、私は。
そう、段階だ。順番に手順を踏んで行けという話だ。
流石に電話で告白はしないだろうから、未だ気持ちが通じ合うとかそれ以前の話で。
大体こういうのは、告白してデートして、名前で呼び合ったりして、何度目かのデートでキスをして、何やかんやあってゴールイン。
そういうものの、はずだろう。
私の願望も多分に含まれたが、大体こんな感じのはずだ。

それがいきなり、ゴールテープとか。
何じゃそら。
健全な深夜アニメが、初回からR―18だったぐらい驚きだよ。
深夜アニメが健全かどうかはさておき、それぐらいの驚きだってこと。
どうしてその結論にいたったのか、妹の私にもさっぱり分からない。
一体、誰の入れ知恵だ。姉にそんなことを吹き込んだのは。
「お姉ちゃん、どうしてそういうことになるの？　ほ、ホテルとか、つまり、そういうことをする所でしょ？」
『泊りじゃないぞ、休憩の方だ』
「そういうことを聞きたいんじゃなくて！　どうしてその結論になるのっ！　小野先輩にそういうことにふしだらって思われていいの!?」
『しかし、年頃の男子は基本的にそういうことばかり考えていると……』
「そ、それはそうかも知れないけど。いやいや、だからって本能丸出しは無いよ。そんなことしてる男子がモテるワケ無いでしょ！」
『小野君はそんな人じゃないぞ、安心しろ』
「分かってるよっ！　お姉ちゃんよりもね！」
知り合った期間なら、妹の私のほうが長いんだぞ。

そんな相手だったら、そもそも戦車道チームには入れてないし、姉に連絡先を教えるなんてしない。

『それにだ。手元の資料によれば、S○Xまでに至るデート回数は年々減少傾向にあるというデータが……』

「なにその資料？　雑誌？」

『後輩が戦車に持ち込んでいたのを、没収したんだが。それに』

「捨てて、それデタラメだから」

『し、しかし』

「捨てなさい」

『……ハイ』

そんな雑誌のデータが、信用できるはずが無いでしょうが。

スポーツ新聞の見出しか、政治家の公約ぐらいの信用も無いのに。

「いい、お姉ちゃん。会うのは良いけど、ホテルはダメだからね。絶対。大体、それが上手くいったとして、私はどんな顔して小野先輩と顔を合わせればいいの？　姉がエッチでごめんなさいと、言えとでも？」

『言葉にされると、恥ずかしいな……』

恥ずかしいのはこっちだよ、馬鹿野郎。

年頃の娘に、エッチだのホテルだの言わせておいて、何いっちょ前に恥ずかしがりやがる。
「とにかく、一度会ってきちんと告白すること。そういうことは、気持ちが通じ合ってから、時間をかけて行くものなの」
『ま、まさか。みほは経験がっ』
「無いよっ！　常識の話をしてるの、私は！」
『そ、そうか。どこの馬の骨がと思ったが、違うんだな？』
「違うよっ！」
それを言うなら、私の方だろう。そのセリフは。
小野先輩は、知り合いだから別に馬の骨でもなんでもないし、人間性もまともだけど。
「と、とにかく。会って告白して、次の約束を取り付けるだけで終わらせてよね。いい？」
『しかし、それだけだと不安だ……キスもだめか？』
「それは、せめて何回かデートしてからにして」
『つまり二回目以降なら……』
「三回以上」
『……分かった』

「よろしい」
何がそこまで、姉を肉食系女子に全力投球させるのだ。
小野先輩から、変なフェロモンでも出ているのだろうか。
それから何度も姉に釘を差し、その日の電話は終わった。

アンツィオ高校との試合の後しばらくして、小野先輩と姉の関係は一歩進んだようで、姉から『成功した』という内容の電話が来た。
小野先輩からも、人目を偲んでであるが、姉とお付き合いを始めたと伝えられた。
伝え聞く二人の話を統合すると、二人はちょくちょく連絡を取り合っているようで、最近はパソコンの無料ビデオチャットで逢瀬を重ねているらしい。
二人共異なる学園艦にいるのだから、仕方ないのだが。
同じ港に寄港日が重なることも早々無く、姉のほうがやきもきしているようだ。
そんなある日、偶々寄港日が重なり、姉と先輩がデートしたらしい日の夜、小野先輩からメールが来た。

差出人：小野忠勝
送り先：西住みほ

件名：教えてくれ
本文：
西住さんからデートの途中、ホテルに誘われた。
もちろん、俺達には早いと言って断ったのだが。
俺はどうすれば正解だったんだ？
獲物を狙う目にみえて、少し怖かったよ……
……
……
…
あの馬鹿姉めぇっ！

直ぐ様、携帯を手に取り、姉に電話をかけ一時間もの間、説教をした。
それでも、懲りてないような気がする。
ちくしょう、私だけでは無理なのか。
誰か、助けになりそうな人は居ないのか。
黒森峰は……、いないな。
逸見さんが思いつくが、彼女は姉に心酔している節がある。

姉のピンク頭をどうにかしてくれと言ったら、私の方が色々言われそうだ。
実家だと、父か母だが、こういうことに父親を混ぜても余計にこじれるだけだ。却下。
母ならどうか、しかし以前両親の馴れ初めをお手伝いさんの菊代さんに尋ねた時、顔が引きつっていたのを思い出した。
もしかすると、姉の行動は母譲りなのかもしれない。却下。
最後は菊代さんだけだ。
一番マトモで、常識人は彼女だけだろう。
しかし、なんと言って相談しようか。
……ふむ、仕方ない。直球で行くしか無いか。
姉の名誉はズタズタだが、身から出た錆と思ってもらう他ない。

差出人：西住みほ
送り先：菊代さん
件名：私の姉が肉食系だった件
本文：
……
……

⋮

私の姉が肉食系だった件・続き

「はぁー」

白い息が薄暗い寒空に消えていく。

ここは戦車道全国大会準決勝、大洗対プラウダの試合会場で、つい先ほど試合が終わったところだ。

本当にかろうじて勝ちを拾った私達大洗女子は、勝利に湧き踊った。

勝利はもちろんの事、学園艦の首の皮一枚が繋がったことも理由に挙げられる。

これは試合中に分かったのだが、私が転校した大洗女子学園は今年度で廃校になる。

少なくとも、役人の認識ではそうらしい。

それを角谷会長が、戦車道全国大会で優勝したら廃校は取り消しとする、という取引をしたのだそうだ。

全く、それであれ程までの強引な勧誘を、私にしていたのか。

普通なら、反発心から即拒否されかねないだろうに。

生徒会の彼女達も、いや、あのいつも飄々として掴みどころの無い会長でさえ、相当追い詰められていたのだ。

そうでなければ、売れ残り戦車を掻き集め、一人を除きド素人の集まりが、全国大会優勝を目指す事など考えもしないはず。

いや、正直に事情を話されても『諦めたら?』と言う他ない。

今となっては私も、大洗女子に愛着が湧いてしまっているわけだが、それでも優勝という栄光は気持ちだけで得られるモノでは無い。

戦車道が他の競技と違う所は、勝利に必要な要素に、選手以外の部分が多くを占める点だ。

西住流で育って来た私が言うのも何だが、勝利への近道ははっきり言って、予算と運用ノウハウ、そして過去の実績だ。

予算があれば、質の良い戦車を大会規定一杯まで揃えることが可能だし、運用ノウハウがあれば、常に稼働状態を維持して訓練に望む事ができる。

優秀な指導者の有無も、此処に含まれるだろう。

過去の実績は、優秀な選手を獲得するのに分かりやすい看板になり、人材の取捨選択という贅沢だって可能になる。

強豪校が強豪校足る所以は、こういった点を備えているからとも言えるだろう。

世知辛い事極まりないが、仕方ない。

とにもかくにも、お金がかかるのだ。戦車道は。

まぁ、大洗女子学園は人も金も実績も無いからこその、廃校の危機なんだけどね。

そういえば、誰が言っていたのか思い出せないが、『他人の財布で戦車転がして悦に浸っている連中』と、罵倒していたのを見聞きした記憶があるのだが、一体誰だっただろうか。

いや、『札束で殴り合う武道』だったかな？

まだ熊本にいた頃のはずなので、少なくともこの数年の内だと思うのだが。

それはいいか。

今はただ、得られた勝利を喜んでいれば。

途中で、後部を砲撃され撃破されたウサギさんチームとカモさんチームを見つけ、カバさんチームと共に牽引ワイヤーで引っ張り、アヒルさんチームのところへ向かう。

カメさんチームは既に、大会運営側の回収チームによって運ばれているらしい。

残りはフラッグ車だった、アヒルさんチームだけ。

無線では、足回りがヤバイと言っていたが、大丈夫だろうか。

撃破判定が無いってことは、まだ動けるという証左でもあるが。

「ねぇ、みぽりん。アヒルさんチーム、まだ見えないね。方向ってこっちで合ってるの？」

「合ってるよ、回収車の小野先輩にも、簡単な修理で自走可能なら自力で。足廻りが完全

に壊れてるなら、小野先輩の回収車輌でって言ってあるから。無線の内容からすれば、アヒルさんチームのところに回収車が向かってると思う」
「八九式は撃破こそ免れたものの、足回りが吹き飛んだって言ってましたからねぇ」
「この寒さの中、周囲に誰もいないのは寂しいですもの。皆で一度集まるのは、気持ちの面でも心強いはずです」
「おい、見えて来たぞ。アヒルさんチームだ」
麻子さんの言葉に、キューポラから身を乗り出していた私の視界にも、アヒルさんチームの八九式が現れる。
これはまた、こっ酷くやられているな。
右履帯何かちぎれ飛んで、何処にあるのか分かりゃしない。
ちょうど同じタイミングで、雪の稜線の向こうから回収車のライトが見えてきた。
ふむ、チーム勢揃いだな。カメさんチームはいないけど……、まぁいいか。
そんな時、ポケットに入っている携帯に着信が入った。
誰だ、こんな時に。
こっちは、忙しいんだ……ぞ……、なぁにこれぇ。
新着メールがあると画面に表示され、携帯を操作するとそこには、聖グロリアーナのダージリンさんからのメールが一件。

差出人：ダージリン
送り先：西住みほ
添付：ＩＭＧ．ｊｐｅｇ
本文：
素晴らしい試合、お疲れ様でした。
ところで、こちらの方は貴方のお姉さんでは？
そして、お相手は確か大洗の生徒だったと思うのですが！
確か練習試合のお礼として、チャーチルの戦車模型をかの殿方から頂いた記憶がございますわ。
ありがたく、自室で飾らせて頂いております。
ウンタラカンタラ
……
……
…
私、このようなこと目がありませんの。
後で詳しく、お聞きしたいわ。

それでは失礼します。
代打ち　オレンジペコ
ダージリン様が失礼致しました。お返事は、無理をなさらなくても結構ですので。

口元が引くつくのを感じながら、私は恐る恐る添付画像を開いた。
そこには、姉と小野先輩が写っていた。
それはいい、それはいいのだ。
一応、恋人同士なのだから、試合会場でちょこっと落ち合うぐらいのことは、まぁ私だって考えなくは無い。
むしろ、有りだと思う。そのシチュエーション、グッと来ます。
問題は、その画像が濃厚なキスシーンだったことだ。
くっそ、私達の試合中に何やってやがる。
何ってナニだよ、って馬鹿野郎この野郎。うらやましかっ！
違う、そうじゃなかった。
ＴＰＯを考えろ、二人共。
試合中なんだから、小野先輩は私達を応援するってのが筋でしょうが。
姉は姉で、偵察してりゃあいいのに。ピンク脳め。

それにしても……、これ絶対入ってるよね。
携帯の小さな画面の中で、私は画像を拡大させる。
ちくしょう、頬を染めやがってからに。
恥ずかしいのは、姉のキスシーンをこうして見せられてるこっちだよ。
ちょこんと背伸びをして、少し上を向く姉。
その大きな手を背中と腰裏に回し、グッと引き寄せる小野先輩。
ちくしょう、そこを代われっ。
じゃなかった、自重して。
お互い初めての恋人じゃなかったのかよ、何か手慣れてる感がむかつく。
不慣れなせいで、歯をぶつけ合ってしまって、互いにぎこちなく苦笑いするとか。
呼吸のタイミングを逃して、息苦しいとか。
そういうイベントはないんですか！
ちくしょう、写真じゃ分からん。
ダージリンさんも、動画で撮ってくれりゃ良かったのに。
やおいかんね。
誰か、これをＹ軸で回転させて。
無理？　くそ。

先輩のフードに隠れて見えない部分が、後少しで見えそうなのに。
携帯の画面を傾けながら、何とか見えないものかと試行錯誤する私を心配してか、優花里さんが声をかけてくる。
まずい、これを見られたら……。
私じゃないのに、すごく恥ずかしい。
「西住殿、どうされたんですか？　先程から、携帯を眺めておりますが」
「い、いいやっ！　何でもないよ！　何でも！」
「みほさん、先程から何を……これって！」
まずい、伏兵が隠れておったわ。
華さんがいつの間にか覗き込んでいたらしく、私の携帯を取り上げ、食い入るように姉と小野先輩の口づけを見つめている。
心なしか、顔を赤らめているような気がする。ていうか、し始めた。
分かる、見てる方が恥ずかしいよね。
「まぁ！　まぁまぁまぁっ！」
「何を見ているんです、五十鈴殿？」
「華、どうしたの？」
「何でもないからっ!?」

「みぽりん、さっきから慌ててるけど……なに、華？　携帯がどうした……はぁっ!?」
「沙織、うるさい」
「うるさいじゃないわよっ!?　どういうことぉ！」
完全に停車した戦車から降りた私は、皆から、特に沙織さんから追及を受けた。
麻子さんも口こそ出さないが、耳をそばだてているのは丸わかりだ。
優花里さんは……何か、髪をモジャモジャさせている。いつものことか。
件の人物である小野先輩は、ついて来た自動車部と共に八九式の足廻りを確認中だ。
あっちに聞きにいけば良いのに、変な所で男子に恥ずかしがるのだから、全く。
これは貸しだけんね。小野先輩、分かっとると?!

「なぁ、西住隊長。何でそんなに怒ってんの?」
「知りませんっ！」
出場選手用の戦車ガレージへ戻る最中、沙織さん達からこれ以上の追及を避けるため、私は小野先輩が運転してきた回収車の助手席へとフェードインした。
普段と異なる雰囲気を察してか、小野先輩は事情を聞こうとするが、ぷいっと顔をそむける私に、先輩は困ったように頬を掻く。
私がどれだけフォローしたか、全く分かってない。

結局沙織さん達には、『姉と小野先輩はお付き合いをしてるんだよ』と、ただ最低限の事実だけを伝えた。

流石に、関係が始まって一週間程度だとは言えなかった。

まだデートもしてないはずでしょうが、約束は何処にいったんだよ、約束は。

（※時系列ではホテル連込み未遂の前です）

せめて三回くらいデートして、お互いの事を理解し合う時間を過ぎてから、キスやらハグやらしたら良いじゃないか。

それが初手から、舌を絡めるような口付けとか。

運転席を見れば、小野先輩はこちらの事を諦めたのか、ライトに照らされた雪道を見ながら慎重に運転している。

……ちくしょう、さっきまで姉とねっとり接吻していた、先輩の唇を意識してしまう。

姉と先輩のアレが近づいて……、先輩の手が背後に回されて力強く抱き寄せられ、息遣いを感じながら舌を……。

うわっ、想像したらドキドキしてきた。

絶対、顔赤いわ、今の私。

暫く、顔の熱を冷ます私は、何故私がこんな思いをしなければならないのかと、ふつふつと何とも表現のしにくい感情が膨れ上がりつつあった。

大体あの二人が悪いのだ、その一方はすぐ隣りにいるし。
ふふん、少しぐらい困らせても、まぁ許されるだろう。
裁判官、検察、弁護人、全て私の法廷も、問題なしと太鼓判を押してくれている。
私は、ゴソゴソとタンカージャケットのポケットに入れていた携帯を取り出し、画面に件の画像を開いて、先輩の前に突き出してやった。
「先輩、これはどういうことですか？」
「ん？　運転中はあぶ……のわっ！」
画像を正しく認識できたらしい先輩は、急ブレーキをかけ、狼狽えたように私の方に顔を向けてくる。
へへ、その顔が見たかった。
荷台に乗っていたアヒルさんチームや自動車部が、どうしたどうしたとざわついているが、何とか気を取り直した先輩が再び車を走らせ始めれば、それも落ち着いてきた。
「こ、これは、いつの間に？　いや、そもそも一体誰が？」
「試合が終わって、聖グロリアーナのダージリンさんから……。事細かに、ナニをやっていたか教えてくれました」
「ダージリンさん……確か、隊長さんだった人か。観客席の近くで、お茶してたから挨拶したけど。あの後、見られてたのかぁ……迂闊だった」

「大体、何でこんなことしてるんですか。その、お姉ちゃんと、き、キスだなんてっ」
「いやぁ、西住さんの妹の隊長に言われると……何か恥ずかしい」
「恥ずかしいのはこっちですっ！　皆に見られちゃったんですからね！」
「マジでッ!?」
「……そういえば、口止めしてたっけ？」
とぼけた様子で私が言うと、小野先輩は目に見えて動揺し始めた。
実際してないし、女子高生に恋愛ネタが流失した時点で、もはや手遅れなので、私がどう言おうと結果は変わりゃしないのだが。
そもそも、私もそこに混ざるし。
「まぁ、人の噂も七十五日と言いますし、そのうち収まりますって」
「二ヶ月半もあるんだけど……」
「身から出た錆では？」
「ちょっと、俺に厳しすぎない？」
「チームが試合中に、彼女とキスしてるような人には、残当としか」
「ぐっ、それを言われると弱い」
「大体ですね、よくそんな時間取れましたよね。試合中ですよ？」
「そう言われても……三時間近く試合が動かなかったところに、その、西住さんから連絡

が来て……（実際は、動かなくなった途端に来たけど）」
「お姉ちゃんから連絡が来て？」
「観客席の彼女のところに行ったら、西住さんと隊長のお母さんもいてビビった」
「はぁっ!?　何で、お母さんがおっと!?」
驚きのあまり、熊本弁が出てしまった。
それは良いのだ、問題は母がいた事だ。
熊本の道場で、門下生をいじめ倒してるんじゃないのか。
わざわざ姉の偵察に、付き合っていたとか？
わからん。
「そ、それで。お母さんはなんて？」
「普通に挨拶した。それと、一応『西住まほさんと清いお付き合いをさせてもらってます』、って」
おいいいっ、それは早すぎんよぉ。
それに、姉とベロチューかましておいて、清いとか。
いや、清い身体って意味なら間違ってない？
待て待て、落ち着け私。少し、毒されてるぞ。
「お、お母さんの反応は？」

「……遠回しに、学生の内は避妊はしろ、と」
理解ありすぎワロタ。
いやいや、もっと娘の貞操を心配しろよ。
あなたの後継者ですよ？
西住流の看板を背負って立つ人材で、西住家長女ですよ？
確かに、初手休憩所を選ぶような姉のことを考えれば、充分心配してるような気もしないでもないけど！
「まぁ、こちらとしても。ガキがガキ作っちゃイカン、ってニュアンスを伝えたよ」
こっちはこっちで、硬派過ぎワロリッシュ。
何をどうしたら、こんなにお堅い男子が出来上がるの。
この年頃の男子は、四六時中おっぱいだのおしりだの、そんなことばかり考えてるんじゃないのか。
くそ、沙織さん。その情報誌、間違ってるぞ。捨ててしまえ、そんなもん。
とはいえ、それなら姉の暴走も、まぁ何とか大丈夫か。
あの姉も実際に誘う段になれば、躊躇して先延ばしにするだろうさ。
（※しませんでした）
「あの……お母さん、私の事なにか言ってました？」

「あぁ、普段の様子を聞かれたよ。元気してるかとか、友達は出来たか、とかね」
「そうですか……」
「戦車道に関しては、後輩なのに頼りにさせてもらってます、って伝えたら満足そうだったよ」
ふ、ふーん？
ま、まぁ？
お母さん達の西住流にはついて行けない所があるけど、それはそれ、これはこれ。
心配されてたのは、素直に嬉しかった。
ん？
まてよ。
ということは母との会合の後に、この人は姉と、そのなんだ、キスしてたのか？
しかし、写真データの撮影時刻は試合が動き始めた辺りだから、その前の大体二時間半は何してた。
母との会話だって、三十分も掛からないはずだろう。
「先輩、この写真が撮られる前は何してたんですか？　二時間半ぐらいはあったでしょう？」
「えっと、そのだな。何というか、二人で少し場所を移動して、観覧モニターを眺めてい

たんだけど」
何とも、歯切れの悪い返事である。
「西住さんが寒がってな。それで、俺は大きめの防寒着を着てたから」
「着てたから？」
「前を開いて、後ろから包み込むように抱き締めてました」
何それ、私もされてみたい！
姉妹なせいか、グッとくるポイントが同じだ。
そもそも、西住流戦車道女子が寒さに負けるなんてあり得ないけど。
「一応言っとくけど、西住さんから言い出したことだからな？」
でしょうね、知ってた。
「へぇ～、じゃあ先輩は迷惑だったとでも？」
「やったぜ、って思いましたっ」
「やっぱり……。それ以外には、何かしました？」
「……ずっと手を握ってた。女の子の手って、男のそれよりちょっと小さくて柔らかくてヤバイ」
その感想はいらなかった……。
ヤバイのは、その辺りを全部計算して行動した、姉の方なんだよなぁ。

小野先輩もまんまと策略に嵌ってるけど、本人は満足してるみたいだし、いいか。
一通り先輩を困らせたし、追及もこの辺にしといてやろう。
私の寛大な処断に、感涙むせび泣いてもいいんですよ？

試合会場から学園艦に戻った私達は、生徒や住民の歓迎を受け凱旋した。
もっとも、戦車は二輌を除いて酷い有様で、どちらかと言うと敗者の出で立ちであったが。
今日のところはガレージに運ぶだけで終わり、本格的な修理や整備に入るのは明日からになる。
何にせよ、損傷を受けた装甲は大洗町鉄工所の装甲板待ちであるし、足回り等の交換も代わりの部品が無ければどうしようもない。
私も自身の寮へ帰宅し、簡単にだがシャワーを浴びて冷えた身体を温めた。
他の皆も、大体似たようなものだろう。
学園艦が南下を始めれば、気温も上昇してくるはずだから、この一日二日の辛抱だ。
濡れた髪をタオルで水気を取りながら、ベッドに座り込む。
ふと枕元に目をやれば、携帯が転がっていた。
そうだ、今日の事を姉にも問いたださねばならないな。

徐に携帯を手に取り、姉に件の画像をメールで送った。
数分もしない内に、電話が掛かってきた。
全く、慌てるぐらいなら最初から自重すればいいのに。
「もしもし？」
『みほ、あの写真は何だ？』
「何って、そりゃナニの写真でしょ。むしろこっちが聞きたいよ、試合中に何やってるの？」
『だって……』
だってて。黒森峰の人達が聞いたら、混乱する。
うちの隊長がこんなに乙女のはずがない、ってなるよ。
『電話だけで、会えないし……。会場に来たら、彼も絶対いると思ったんだ』
「整備班でチームの一員だもん、当然だよ」
『うむ、それで彼に連絡して落ち合った』
それは良い、認める。私も、そうなったら絶対そうするから。
『そうだ、お母様も一緒に来ていたから、彼を紹介したぞ。ハキハキとした物言いで、お母様も気に入ったようだった』
それが、どうして避妊しろに繋がるんですかね？

『小野君の、学生の内は清い交際をしますと言った言葉には、私の見る目に間違いはなかったと確信した。……ボソ（手強い相手だ）』
「何か言った？」
『言ってないな』
　嘘をつけ、聞こえていたぞ。
　欲望に忠実過ぎるのは、戦車道女子の宿命か？
　いや、家だけか。
「小野先輩に聞いたんだけど」
『何を聞いた？』
「お姉ちゃんから誘ったんでしょ、先輩に抱きしめられて良かったね！」
『もちろんだとも』
　皮肉で言ってんだよ、察しろよ。
「何でそんな風に誘ったわけ？　誰かに見られてたかもしれないし、実際こうして写真まであるよ」
『そうは言うがな、目の前にカモがネギ背負って鍋に飛び込んできたら、そりゃあ食べるだろう？』
「確かに食べられてたけどね、先輩が！」

『何を怒ってるんだ？』
「怒ってません！」
『それはそうと。彼と口づけを交わした時に、彼の手が私のブラをジャケットの上から触れたようで、さっと移動させたらその先が私のお尻だったりして、慌てているところは可愛かったぞ。グッと来た』
胸にしまっとけよ、そういうのは！
『私もつい変な声が出て、舌を差し出してしま――プツ』
つい、電話を切ってしまった。
……、もういいや。どうにでもなれ。
決勝では、この怒りを砲弾に乗せてやる。
それはそうと、メールで聞くことが増えたな。
私は、ポチポチと携帯を操作し、メールの文面を打つ。

差出人：西住みほ
送り先：小野忠勝
件名：どういうことですか？
本文：

お姉ちゃんのお尻を触っていたとは、どういうことですか?!
内容によっては、沙織さんに話しますからね！
そしたら、一斉に皆にバレますから！
……
……
…

次の日、長く苦しい協議の結果、私と先輩は『限定版ボコのぬいぐるみＤＸバージョン』で手を打つ条約を、締結する。
平和は、守られた。
先輩のサイフは、死んだ。

私の姉が肉食系だった件・続き　その２

いよいよ、ここまで来てしまったか。

本日は戦車道全国大会の決勝戦、我らが大洗女子学園対私の古巣である黒森峰女学園の試合である。

これに負ければ、私達には学校を諦めるしか選択肢は無くなる、少なくともそう聞いている。

負けるつもりもさらさら無いが、じゃあ勝てるかというと、それも困難というものだ。

黒森峰は確かに、昨年度の優勝を逃した。

しかしながら、それは黒森峰が弱体化したという意味ではない。

むしろ、昨年の雪辱を果たすために、強化されていると表現した方が正しいと思う。

私の姉で、西住流戦車道の後継者でもある西住まほが、引き続き隊長として指揮を取っていることも、その懸念を裏付けているだろう。

我が大洗女子の戦車道チームも、選手一人一人の技量については決して劣りはしないと見ているが、如何せん戦車の質と量は覆しようがない。

……何度考えた所で、現実は変わらないか。

頭を切り替えよう、今は試合前の選手用戦車ガレージで最後の点検と砲弾や機銃弾の積み込み、燃料補給を行っている。
既に皆慣れたもので、それぞれの戦車について作業を行っている。
私も、あんこうチームの皆と作業しなければ。
そのように考え歩みを進めていると、前方から小野先輩の姿が見えてきた。
皆に水分補給を促しながら、ペットボトルを手渡しているようだ。
確かに今日は猛暑というほどではないが、日差しも照りつけており、試合中ともなればエンジン全開の戦車の中にいることになる。
熱中症にでもなれば、大変だ。
ただでさえ、戦車道は激しい武道で、戦闘機動中ともなれば汗などいくらでも噴き出してくる。
花も恥じらう女子高生（ここ大事）としては、制汗スプレーの一つでも戦車に置いておきたいところだが、流石に何かの拍子に破裂しかねないものを、戦車内にいれるわけにもいかなかった。
だから沙織さん、持っていくのは保冷剤を包んだタオルで我慢してね。
つらつらとそのようなことを考えていると、既に小野先輩が目の前にいた。
大きめのクーラーボックスを台車に乗せて、右手に持った水滴の浮かぶペットボトル

を、こちらへと差し出している。
「あ、どうも。ありがとうございます」
「水分補給は、小まめにな」
「分かってますよ、戦車の中はここよりもっと酷くなるんですから」
「だろうね、ハッチをいたずらに開けるわけにもいかないしな」
「えぇ、まぁ。……あれ？　先輩は、戦車の中がどんな感じになるか知ってたんですか？」
「あぁ、ほら。俺は、戦車の整備も手伝ってるだろう？」
「はい、自動車部の皆さんと一緒にやってるんですよね。確か」
「そうなんだ、最初の頃は整備マニュアルの読み方すら、分からなかったぞ。一つのボルト外すごとに印つけたり、携帯で写真取ったり……、大半は自動車部の皆の補助で終わってたなぁ」
「あはは、お疲れ様でした」
　その言葉で思い出したが、練習後何度も整備について聞かれたなぁと、私は以前の先輩の様子を思い浮かべていた。
　角谷会長から紹介されて直ぐの頃に聞いてみた話によると、似たような機械いじりは実家にあるらしいハイパーカブのオイル交換を手伝った程度、なのだそうだ。

機械系の学科かよっぽど興味がある人でもない限り、戦車の整備に手を出す男子はそうそういない。
共学の学園艦の戦車道チームであれば、小野先輩のように裏方として参加することもあるらしいのだが。
大抵は女子だけで充分な人数が揃ってしまうので、男子がわざわざ入り込む余地も少ない。
そもそも、男子は選手として登録されないので、門戸そのものが閉じられていると言っても、まぁ間違いではないのだ。
その点ウチだと、選手だけでもギリギリの人数なので、小野先輩のように裏方専門で頑張ってくれる人は非常に有り難い存在だ。
「どういたしまして。そう、整備が終わった後の話になるんだけど、整備したからにはきちんと動くかどうか確認がいるだろう？　当然」
「まぁ、そうですね。本番で動かないんじゃあ、困りますし」
先輩は少し辺りに目配せして、私の方へ顔を寄せてきた。
そして自身の口元を隠すように手を当て、小声で続きを語る。
「ここだけの話、自動車部の皆と戦車乗り回してた」
はぁ、そうですか。

私の淡白な反応に、先輩の予想と違ったのか、こちらを不思議そうに見ている。
「隊長は、男が戦車に乗るなんてって、言わないんだな」
私は原理主義者じゃないんだぞ、全く。
……試合に出たいとか言い出したら、空気読めよと言っちゃうけどさ。
「いえ、私はその辺のことに特に拘りはないので。こう言っては何ですけど、公式戦にこそ出られませんが、趣味で戦車乗り回してる男性は一定数いますし。そもそも自衛隊には、普通に戦車に乗っている男性隊員さん、いらっしゃいますから」
以前、母から聞いた話になるのだが。
戦車が好きな男性が戦車に乗るためには、自分で買うか、自衛官となるか、大体その二つぐらいしか選択肢が無いのだと言っていた。
幼かった私は、『じゃあ、お父さんがお母さんと一緒に戦車の中にいたのは、お父さんが自分で買った戦車だから？』と聞いてしまい、母を慌てさせてしまった記憶があるが……、あれは中でそういう事に及んでいたからだろうなぁ。
あんな狭苦しい中で、何やってんだか……そりゃナニだよ、分かってるよ。
私だって、心に決めた相手がいるのなら、そういうシチュエーションもありだと思うけども。
そう思いながら、私はちらりと最も身近な男子である先輩を盗み見る。

先輩は、売約済みだしなぁ。
……戦車の重量で揺れが消えて、外からでは分かりづらかったりするのだろうか。
後でメモっとこ。
いやいや、この話はもう止めよう。
このままでは私まで、姉みたいな思考になりそうだ。
私は遠い記憶の残滓に、大人になった哀しみを覚えつつ、先輩との会話を続けた。
「そういえば、今日はお姉ちゃんと会ってないみたいですね。押しかけて来そうですけど」
先輩はびくりと身体を強張らせ、私の方を見やる。
ダメだ、笑うな私。
普段は私が受け身で、困惑させられっぱなしなのだ。
ニヤつく口元が隠せていないが、たまには此方から先に困らせても許されるだろう。
「隊長、面白がってるだろう?」
「まさかっ！　とんでもない、本当です」
さも心外だと言わんばかりの表情で、私はそのように答えたが、先輩にはお見通しのようだ。
「はぁ、……まぁ言っちゃうけど、連絡は来てたよ。試合前に会おうって」

ですよねー、知ってた。
こんなチャンス、見逃すような姉じゃないもの。
でも、先輩の口ぶりではそうはならなかったようだ。
「それで？　どうしたんです？」
「そりゃ断わったよ、試合前に対戦相手の隊長と密会するなんてな、出来るわけない。チームに対する背信行為になりかねん、そのつもりが無くても情報を流したなんて思われたらたまらないよ」
意外と、しっかり考えての行動だった。
いや、それほど意外でもないか。
姉からのホテルへの誘いを、断るような男子高校生なのだ。
それにどうも、フェアプレイを好んでいるような節もあるし。
姉の方で問題が起きないようにとの、配慮かもしれないな。
仮に試合前に密会していたとして、試合で負けてその後逢瀬の事実が洩れたら、事前に情報を流したスパイのような扱いをされるかもしれない。
チームメイトはともかく、ＯＧなどからは特にその手の追及がしつこい可能性があるのだ。
どうもあの手のＯＧは、黒森峰戦車道をブランド物のバッグか何かと勘違いしている

ような、そんな印象を受けることがある。
彼女達ＯＧを着飾らせるために、勝利しているわけじゃないんだぞ。くそったれが。
おっと失礼、戦車道女子にあるまじき、淑女らしからぬ言葉だった。
この場合は、『排泄物をお召し上がりくださいませ、ご婦人方。いや失敬、まだ一輪の花でございましたな。既に、干からびておられるようですがね。あっはっは！』、がふさわしいか。
いやぁ、毒だ毒だ。
口に出さんとこ。
全く、姉は人生のターニングポイントを着々と攻略しつつあるというのに、あの行き遅れ……じゃなかった、ハズレくじ……でもない、ワゴンセール……とも言えない、……訳あり商品。
そう、あの訳ありセール品共ときたら。
私達が去年負けたせいで、あなた方が負け続けているわけじゃないんだぞ。
それだと言うのに、去年はガレージにまで乗り込んできてグチグチと……。
あんたらの、潰れたクリスマスの予定なんざ知るかよ。
ぬしゃあ、うたるっぞ、こら。
……いけないな、少し頭に血が上ったようだ。

もう過ぎたこと、忘れて今日の試合に専念しようじゃないか。
おっと、先輩とも会話中だったのを忘れてた。
怪訝な表情で、こちらを見ている。
「あ、ごめんなさい。ちょっと、姉がそれで諦めたのが不思議だったので」
とっさの取り繕いであったが、思った以上に説得力が感じられる。
それだけ姉の行動が、突き抜けているということなのだろうが……。
そこまで前のめりになる恋をしているのを見ると、正直羨ましいとしか言いようがない。
まぁ、それはまた今度考えるとしよう。
「あぁ。西住さんには変わりに、試合が終わった後ならいくらでもって言ったから」
「そういうことですか……」
とっさに天秤に掛けたんだろう、姉は。
試合後、黒森峰が勝てば先輩を慰める事が出来るし、負ければ姉が慰めてもらえる。
一粒で、二度美味しい。一挙両得、一石二鳥、濡れ手に粟、ギャンブルするなら胴元になれ……いやこれは違うか。
どっちに転んでも勝利条件を達成するって、そりゃないよ。
私だって慰めてほしいわ、ホント。

具体的には、去年の夏頃だったらもっと良かった。
なんなら、今からだって良いんですよ？
その後、あれやこれや話していたら、沙織さん達に積み込みを手伝うように呼ばれた私達二人は、会話を中断し元の作業へと戻っていった。
さぁ、そろそろ本番だ。
チームの士気も高く、変な気負いも見られない。
今までで一番のコンディションだと言っても、過言ではないはずだ。
姉よ、我が怒りの徹甲弾を楽しみにしているといい。
……優花里さん、どうしたの？
え、『悪の女幹部』みたいな目つきだった？
そんな馬鹿な、どっちかと言えば戦隊モノのピンクやホワイトポジションでしょう？
華さんも沙織さんも、首を振っちゃって……もう、麻子さんまで。
解せぬ。

『黒森峰、フラッグ車、行動不能！　よって、大洗女子学園の勝利!!』
損害著しいⅣ号のキューポラから頭だけを出した私は、目の前に鎮座する黒森峰フラッグ車の白旗と、Ⅳ号車内の無線から聞こえてくる大洗女子学園の勝利宣言に、よう

やく力を抜くことが出来た。
ティーガーから上体を出している姉の姿も見えるが、あちらも似たようなもの。
お互いが全力を尽くした結果が、ほんの僅かの差を生み出し、私達大洗女子学園に勝利をもたらしてくれた。
たとえ一つでもボタンを掛け違えていたら、このような結果ではなかっただろう。
それだけ、薄氷の勝利であった。
ずっと踏ん張っていたためか、ふらつく私を見かねて皆が支えてくれる。
その助けを借りて、ようやく地面へと降りることが出来た。
そしてあんこうチーム皆で、武勲車であるⅣ号を眺める。
履帯などすべて吹き飛び、転輪だって無事なものの方が少ないくらいだ。
シュルツェンも無くなっているし、最後のティーガーの砲弾が掠めた装甲も酷いダメージを受けている。
本当に、お疲れ様でした。
そう心の中でつぶやき、私はⅣ号の装甲にそっと手を当てた。
……うん、感傷はこの辺でもう良いだろう。
今は、この勝利と優勝と。そして、学園艦の存続を諸手を上げて喜ぼう。
しみじみと心地よい疲労感を感じていたところで、小野先輩が回収車に乗ってやって

きた。
フロントガラス越しに見える先輩は、こちらを見つけたようで笑顔で手を振っている。
私達あんこうチームもそれに答えて、手を振り返していた。
目の前に駐車した回収車の荷台には、Ⅳ号の予備転輪や履帯、そして種々の工具類が積まれていた。
恐らくモニターで見ていたのだろう、準備が良くて助かる。
今のままでは回収車に載せることも、牽引することも出来ない。
大会運営側に任せることも出来るのだが、ここまで一緒に戦ってきた仲間なのだ。
ここに放置していくのは、忍びなかった。
小野先輩が運転席から降りてきて、私達に近寄ってくる。
「隊長、皆。お疲れさまでした」
「先輩！　お疲れ様でーす！　私、頑張りましたよー！」
「小野殿、お疲れ様です！　それと、予備の部品ありがとうございます！」
「はい、お疲れ様です」
「おつかれー」
「小野先輩、回収車ありがとうございます」

それぞれが口々に返事をする、体力こそ使い果たす寸前であるが、勝利に浮かれている私達はまだまだ元気いっぱいだ。
先輩もその声を聞いてか、満足そうに頷いている。
そしてどうしてか、私の方へ一歩近づいてきて、私の両肩に手を置いた。
ちょ、ちょ、ちょっと！
それはまずいですよ、先輩には姉という恋人が……。
いや、でも、先輩にその気があるのなら、私もやぶさかじゃないっていうかですね？
いやー、マジ困るばい！
モテる女はつらかねー！
かぁー、つれーわー!!
「隊長、お疲れ。そして……ありがとう」
言葉少ない内容であったが、そこには万感の思いがこもっている気がした。
先輩の瞳には薄っすらと涙が滲んでいるようで、潤んでいるのが見て取れる。
……なんだ、違うのか。
まぁ、そんなことだろうとは思いましたけどね！
沙織さん、そして皆も、キャーキャー言っても何にも無かったから。
だからその携帯をしまいなさい、いいね？

そんなこんなの青春の1ページを刻みつつも、私達は茜色に空が染まる前に最低限の修理を終え、選手用のガレージへと戻ってきていた。
そこには既にチーム全員が揃っていたようで、盛大な歓迎を受ける。
あの角谷会長でさえ、涙を滲ませながら私に抱きついてくる始末。
色々と無茶をしてきた会長も、ようやく肩の荷が降りたのだろう。
学校の存続が崖っぷちという中、ずっと奔走して来たのだ。
その苦労も報われた、ハッピーエンドとは正にこの様な最後の事をいうのだと思う。
回収車を少し脇に止めて来た小野先輩も、この勝利に湧く私達の輪に加わった。
私から離れた会長と、何か話している。
そういえば、あの二人は同じ生徒会役員なせいか、意外と仲が良い。
既に二年と数ヶ月は、一緒に生徒会にいるのだ。
よっぽど反りが合わないでもない限り、そうなるのは普通だと思うが。
あ、ニヤニヤしながら拳をぶつけ合ってる。
いいなぁ、ああいう男女の友情って。
私には無いものだなぁ。
さて、もう一時間もしないうちに表彰式が始まる。

そろそろ行かなければならないが、少し離れたところに黒森峰の選手達が見える。
その中には当然姉もいて、あちらも私に気付いたらしい。
私は、チームの皆に少し待つように伝えて、姉の元へ歩いていった。
「お姉ちゃん」
「みほ……優勝、おめでとう。完敗だった」
「そんな事ないよ、ギリギリだったもん」
「フラッグ車を仕留めきれなかった、そうさせてくれなかったみほの勝ちさ」
「そうかな？」
「そうだよ」
姉の顔を見れば、いつもとは違う柔らかい表情をしていることに気づく。
そんな姉に私も自然と口元がほころび、笑顔となって相対できた。
転校した直後だった頃は、こんな風になれるなんて思ってもみなかった。
「私、見つけたよ」
「うん？」
「私の戦車道！」
「あぁ、そうだな」
そうしてどちらとも無く右手を差し出して、お互いの健闘をたたえて握手を交わす。

グッと握りしめる掌から、姉の気持ちが伝わってくる気がした。
私の想いも、伝わっているといいけど。
……、……ちょっと、長くないですかね。
そろそろいいだろうと、私は力を緩めるが姉にその気配がない。
「お姉ちゃん、ちょっと……」
「何だ」
「手をそろそろ離してくれると」
「……小野君は？」
「えええ～？」
ここでそれね!?
たいぎゃよか雰囲気だったばいっ、今んとは！
このままエンドロールとスタッフロールが流れても、おかしくなかったじゃんよ。
そして大洗町を凱旋しながら、学園艦に戻るシーンが最後に差し込まれるんだよ、最後の締めに。
それが、いつの間にコントに……。
NGシーン集か、これは。
おう、ミスったスタントシーン出してみせんか。

ポップコーン片手に、笑い飛ばしてやるから。
遠慮すんな、私はしてない。
おい、私の背後をちらちらと覗いてんじゃない。
先輩は皆を載せたトラックの運転席にいるから、こっちからは見えやしないよ。
そうこうしていると、戻らない私が気になったのか背後のトラックの方がざわつきだし、とうとう先輩が代表して様子を見に来た。
こら、そこ。
やったぜ、みたいな顔しやがって。
誰のせいだよ、誰の。
直ぐ後ろに見える黒森峰の人達も、困惑顔だよ。
ほら、逸見さんもどうしたら良いのか分からない表情しちゃってる。
歩いてくる先輩を振り返ってみれば、どうも困惑しつつも気恥ずかしいようで鼻の頭を触っている。
へぇ、緊張したりするとあんな感じなんだ。
いやいや、それは置いておいてだ。
いつの間にか、握手解かれてるし。
私は、まんまとダシに使われたらしい。

くそ、全く予想がつかねぇ行動しやがりますね、我が姉は。
すぐ隣にたどり着いた先輩は、まず黒森峰の選手たちに会釈していた。
あちらも、『あ、どうも』みたいな反応を返している。
大洗女子のチームに男子生徒がいることに、ちょっとした驚きがあったのだろう。
こちらにもかすかに聞こえるくらいには、ひそひそと先輩について話しているのが伝わってきた。
まぁ、黒森峰のチームにはいないもんな、男子。
自分が話題にされていることを知ってか知らずか、先輩は私達二人に話しかけてきた。
「隊長、西住さん。そろそろ、表彰式に向かわないと。時間が迫ってきてる」
「私もそうしたいのは、やまやまなんですけど……」
返事を返した私は、そう言ってちらりと姉の方へ視線を向けた。
少し頬を膨らませた顔で、先輩の方を若干不満そうに見ている。
おいおい、まじかよ。
どこでそんなスキル磨いてきたんだよ、雑誌か、あの怪しい雑誌か？
案外、ウチの沙織さんと話が合うんじゃねーの、姉は。
そんな姉の表情に、先輩もタジタジな様子で、後頭部に手を置きながら何やら謝って

いるようだ。
いや、内容は丸聞こえですけどね。
二人共、隣に私がいるの忘れてやしませんか。
姉よ、貴方の部下達もすぐそこにいるんですよ。
さっきよりざわつきが大きくなってまっせ、おーい。
「小野君、私は連絡を待ってたんだが」
「そうは言ってもね、西住さん。ほら、ウチの戦車回収したりしてたし。もうすぐ表彰式もあるしさ、色々動き回ってたら空き時間が見つからなくて……」
「私は、約束通り待ってたのに」
腕組みをして、拗ねたようにじわりじわりと攻める姉に、先輩も打つ手なしの様相だ。
「うっ、そう言われると返す言葉もない」
「一つ、お願いを聞いてくれるなら、許してもいい」
あ、これは罠ですわ。
私は詳しいんだ、間違いない。
ほら、目つきが完全に獲物を狙う肉食獣だもん。
選手達を乗せているトラック運転席の逸見さんも、姉と先輩の間を視線が行ったり来たりして、オロオロしっぱなしである。

諦めてくれ、私はもうお手上げだ。
だから、助けを求めるような目でこちらを見るな。
姉は一歩先輩に近づいて、少し背伸びしてから先輩の耳元で、ボソボソと何事か呟いた。
先輩は口元をひくつかせ、私や黒森峰の選手達を流し見るが、仕方あるまいと諦めたように行動に移す。
姉は、すっとまぶたを閉じ唇を小さく突き出しているが、先輩はそれを避けてそっと腕を広げた。
姉の背中に腕を回し、優しく抱きしめ、『お疲れさまでした』と耳元で囁いている。
選手達からは黄色い歓声と、困惑の声が入り交じる騒音が発生した。
逸見さんの方は……うわ、顔が劇画みたいになって固まってる。
ハンカチを噛みしめるようなマネだけは、止めてくれよ?
少し離れた大洗チームからも、やんややんやと囃し立てる声やピュイ―と指笛が聞こえてくる。
盛り上がりすぎだろ……、いや私も関係ないなら、そっちでキャーキャーやってるだろうけど。
目の前で、抱擁シーンを見せられるこっちの身にもなってくれ。

しかも身内だぞ、むしろ私が恥ずかしい。
少し不満気な様子を見せていた姉も、ポンポンと背中をあやすように当てられて、その先輩の精一杯の慰めに満足したのか、表情も緩み切って先輩の胸に顔を埋め、自身の両腕を彼の背中に回した。
だらしねぇ顔しやがる、ちくしょう。
私と変われ。
いやいやそうじゃない、時間が押してるって言われたでしょうが。
ほら先輩も、姉の胸部を楽しんでる場合じゃないでしょう。
さっさと行きますよ！
「隊長、耳を引っ張らなくたっていいじゃないか……」
「へぇ、お姉ちゃんのおっぱい楽しんでた人の言うことは、違いますねぇ」
私はそう言い放って、早足で皆の待つトラックへと向かう。
振り返れば、表情の固まった先輩が私を見ていた。
私は、べぇーっと舌を小さく突き出し、怒った風を装ってまた歩き出す。
先輩は何やら釈明しながら後ろをついて来るが、後ろからではしてやったりとした顔の私に気づかないだろう。
これはお返しです、これぐらいしたってバチは当たらないでしょう？

なお、学園艦に凱旋してから数日後、この時の抱擁シーンが校内新聞にすっぱ抜かれたが、角谷会長によって差し押さえられた模様。

さす会。

私の姉が肉食系だった件・劇場版

くそったれめ。

それが、今の私の正直な気持ちだった。

大洗女子学園が、戦車道全国大会でドラマチックな優勝を掴み取り一躍有名になった後、夏休みという長期休暇を利用した四校の戦車道チームが参加するエキシビジョンマッチが行われた日の夕方。

私達大洗戦車道チームメンバーは、封鎖線でぐるぐる巻きにされた校門前に集合し、角谷会長より衝撃の事実を突き付けられていた。

「大洗女子学園は、八月三十一日付で廃校が決定した」

周囲のメンバーは口々に異を唱え、反発する。

それを会長は表情を動かさず、受け止めていた。

いや、会長こそ声高に否と答えたいはずなのだ。

やや強引とは言え、西住流を知る私をチームのトップに据え、かき集めとは聞こえは悪いものの戦車を戦力化し、優勝までのか細い糸を手繰り寄せたのは、ひとえに会長の尽力によるところが大きい。

正確には、生徒会の三人と言うべきか。
全国大会優勝は、チームメンバーの誰ひとりとして欠けてしまっては成し得なかったが、学園艦存続はそもそも会長達がいなければ可能性すら無かったのだ。
その会長が、廃校を伝えている。
よほど事情がある。
私は、そのように考えながら、会長の話を静かに聞いていた。
会長の話をまとめると、廃校撤回はただの口約束で正式なものではなく、学校存続を考慮する程度のものだったらしい。
更には、私達がこの決定に反発するならば、艦内の一般住民の再就職の斡旋を白紙とするとの通達があったそうだ。
そして私達の戦車は、文科省預かりになる……。
皆、口々に抗議の声を上げているが、会長の一喝と小山先輩の呼びかけにシンと静まり返った。
分かっているのだ、皆。
会長に抗議をぶつけても、筋違いであることを。
そのままの流れで、意気消沈したままの私達は一旦その場を解散し、戦車をガレージに戻した後、それぞれの荷物をまとめるために帰宅することになった。

帰宅途中、いつものメンバーと別れた私は、再び校門前にいた。
未だに廃校という事実を受け入れられないのか、何となく足が伸びてしまったのだ。
校門には角谷会長がまだ残っていたらしく、校門脇の壁に背中を預けていた。
視線があった私は、会釈だけで挨拶し、特に何を見るわけでもなく校門から見える校舎を眺めていた。
会長も私に特に用は無いらしく、こちらを放って置いてくれている。
しばらく静かな時間を過ごしていると、戦車道チームで備品運びに利用している軽トラックが、校門へと横付けされる。
小野先輩だった。
そういえば、先輩は試合後に損傷した戦車を可能な限り修理した後、試合会場に残されている細々としたチームの備品を、最後に運ぶために陸に残っていたんだった。
会長が既に連絡していたのだろう、先輩は軽トラから降りると会長の元に向かい、何やら話している。
なるほど、それで会長は残っていたのか。
そういう私も、何となくここにいたわけであるが。
会長と話している小野先輩は眉間にしわを寄せ、腕を組み、足元は苛立ちを隠せないようにつま先で地面を叩いていた。

そして最後に大きく息を吐き出すと、腕組みを解く。
すると校門前に突っ立っていた私に気が付いたらしく、先輩がこちらに歩み寄ってくる。
その後ろの会長は何処かに移動するようで、片手をひらひらさせながらこの場から去っていった。
「隊長、廃校の話は聞いた？」
「……はい、急すぎてちょっと戸惑ってる感じです」
「俺は、腸が煮えくり返る気持ちだよ。隊長達が頑張ってきたのは、こんな結末のためじゃ無かったはずだ」
先輩は苛立ちを隠せないらしく、ＫＥＥＰ　ＯＵＴのテープで封鎖された校門を睨みつけている。
まぁ、その気持ちは私も、そして皆も同じだろう。
約束を反故されたのだ、今はその事実を消化しきれていないだけで、怒りは後から更に湧いてくるはず。
「先輩、この後は帰るだけですか？」
「帰って荷物をまとめたら、生徒会の方に行かないといけない。色んな書類を、ダンボールに詰めてしまうんだと。会長が言うにはね」

「あぁ、それで会長が残ってたんですね」
それぐらい、メールか電話でもいいだろうに……。
いや、重要な事だからこそ、面と向かって伝えたかったのかもしれない。
「そろそろ、帰ろうと思うんだけど。隊長、軽トラで寮まで送ろうか？」
「いいんですか？　備品の私的利用は、風紀委員の取締りにあいますよ？」
「文科省が言うには、俺達は『生徒じゃない』らしいから、校則の適用外だろうさ。盗んだ原付じゃないだけマシってことにしようぜ？」
キーリングを指でくるくると回し、先輩はまるでイタズラをしようと言わんばかりの笑顔でそう言った。
ふふふ、それもそうだった。
生徒でないのなら、校則違反なんて存在するわけがない。
先輩のささやかな反乱に、私もノッたとサムズアップし、助手席へと乗り込んだ。
……あ。これって姉よりも先に、先輩の助手席に座ることになってないか？
へっへっへ、メールで自慢しちゃろ。
実際は、準決勝でも乗ってたけど、それはそれだ。
運転席でこちらを訝しむ先輩を宥めすかし、携帯で写真を取った私は、姉へのメールに添付して送信ボタンを押した。

送り先：西住まほ
差出人：西住みほ
件名：Ｎｏｎｔｉｔｌｅ
添付：ＩＭＧ．ｊｐｅｇ
本文：
誰の助手席にいると思う？
……
…
ピロリンと、すぐさま返信が来た。
反応が早いな、姉は携帯打つの苦手だったと記憶していたが。
なになに、『うらやまけしからん』。
どっちだよ、いやこの場合両方で正しいのか。
そして間髪いれずに、携帯に着信が入る。
予想通り、姉からだ。
通話ボタンを押した私は、携帯を耳に当てた。

「もしもし、お姉ちゃん？」
『みほ……怪しいと思っていたが、やはり』
「やはりじゃないよ。お姉ちゃん、何言ってるの。そんなわけないでしょ」
『本当だな？』
「本当だよ。今日は遅くなったから、送ってもらってるの。何ならスピーカーにして、先輩と話す？」
『もちろんだ』
もうちょっと、疑うぐらいしてもいいんじゃないですかね。
まぁ、私だって含むところは無いので、全然構わないのだが。
面白がってるだけだ、本当だぞ。
携帯を操作し、スピーカーを起動させた私は、先輩にも姉とつながっていることを告げて、話し出す。
「お姉ちゃん、いいよ」
『小野君、私より先に他の女を助手席に乗せるとは』
言葉がストレート過ぎっとじゃなか？
だいたい女て、あたしゃ神様だよ。
違った、妹だよ。

私だって、自分の恋人が助手席に姉を乗せているなんて聞かされたら、心穏やかとはいかないけども。

先輩の方を見てみれば、少しまずったなという表情をしている。

「……西住さん、怒ってる？」

『怒ってない、小野君にやってもらうリストが増えただけだ』

「それは、怒っていると言うのでは……」

『怒ってない』

「アッハイ」

隙あらば攻め込むその姿勢、私も見習うべきだろうか……。

その後短い時間ではあったが、私の寮に辿り着くまで、二人は楽しそうに通話していた。

ちょっと、私の携帯ですよ。

二人だけの会話なら、自分のでやってくれ。

こちらからスピーカーにしておいて、言うのなんだけどさ。

全く、姉の言う『リスト』の内容も分からなかったし。

……これは私も『リスト』ってヤツを、作っていい流れでは？

いや流石にそれは、でしゃばり過ぎか。

寮の前で降ろされた私は、先輩と別れ荷物をダンボールへとまとめる作業を始めた。
まだ転校して半年ほども経っていないので、荷解きした時のダンボールが残っていて助かったのだが、如何せん増えてしまったボココレクションの分は入り切らない。
先輩との友好条約で入手したボコは一際大きく、布団用圧縮袋でも使わないとダンボールにすら収まる様子がない。
ふむ、流石にこれは欲張りすぎただろうか。
さてどうしたものかと思案していると、携帯に沙織さんからのメールが入ってきた。
なになに、『最後だし、一度ガレージに集まらない？』。
実際はもっと文面が長かったが、端的に表すならばこれに尽きた。
……うん、そうだった。
一緒に苦楽を共にしてきたのは、私達選手だけじゃなかったな。
沙織さんのことだ、恐らく他の皆にも似たようなメールを送っているのだろう。
最後にきっちり整備して、ピカピカに掃除をするというのもいいかもしれない。
私は返信に、『了解しました』と打ち込みながら、出かける準備を始めた。
ガレージにたどり着いた頃には、既に大半のチームメンバーが集まってきており、各々戦車の周りで話し込んでいた。
園さんは何故か校門の看板を持っているが、あれは力ずくで剥がしたのだろうか。

やはりタガが外れると、振り切れるタイプだったらしい。
このまま、校舎の窓を割りに行かないことを祈る。
周囲を見回してみればあんこうチームも揃っているし、他のチームも生徒会以外は揃っているようだった。
しかし、グラウンドの車はなんだろう。
何やら小野先輩が走り回って、ヘッドライトを付けて回っているが。
その様子を見ながらチームメンバーと話していると、声が聞き取れなくなるほどの大音量が空から降ってきた。
何処のアホだ、このクソ五月蝿い騒音を撒き散らしているのは!?
音の方角に目を凝らしてみれば、何やら大型飛行機がグラウンド目掛けてアプローチ体勢に入っているではないか。
すぐ隣では、優花里さんが大興奮に包まれているらしいが、騒音のせいで何も聞こえない。
着陸と同時に行われた逆噴射によって砂埃が巻き上げられ、視界が一瞬途切れた。
それが収まると、いち早くその飛行機が何なのか気が付いたらしい優花里さんが、興奮しながら駆け寄っていく。
「サンダース大付属の、C―5Mスーパーギャラクシーじゃないですかぁっ!!」

そうだね、凄いね。
全身に浴びる事になった、砂も凄いけどね。
パタパタと制服や髪についた砂埃を払い落とし、私達は飛行機へと近づいていく。
すると、いつの間にかいたらしい生徒会メンバーが、近くに並んでいた。
会長達の話によれば、どうやらサンダースのご厚意で戦車を預かってくれるらしい。
戦車は、すべて紛失したことにするとのこと。
そりゃあいい。
文科省としては面白くないだろうが、それはこちらも同じだ。
この程度の意趣返し、あちらからすればただの書類上の出来事だろう。
戦車をそのまま渡すという、約束をしたわけでもないんだから。
いや、文科省によれば約束は破られるのが当たり前らしいので、しない方がよっぽどいい。
いいぞ、もっとやれ。
そんなことを考えていたら、飛行機の頭の部分が大きく開かれていき、横からはタラップが滑り出して、中にいた人達が降りてきた。
「ハァーイ！　お待たせッ!!」
降りてきたのは、サンダース隊長のケイさんとアリサさんだ。

そういえば、アリサさんは片思いの行方はどうなったんだっけ。
『うちの姉は上手くいきましたけど、アリサさんはどうですか？』って聞いたら、答えてくれるかな。
……いや、ダメだったら傷を抉ることになるし、止めとこ。
今度、こっそりケイさんに聞けばいいよね。
「ハァイ、みほ。元気してた？」
「はい、お久しぶりです。ケイさん」
こちらに気付いたケイさんは、片手を上げながら歩み寄ってくる。
しかし、どうやら私以外の人を探しているようで、あちらこちらに顔を向けていた。
「誰か探してるんですか？　会長ならあっち、優花里さんなら向こうですけど」
「ううん、そうじゃなくて。まほの彼氏がいるって、聞いてたんだけど」
ケイさんはそう言って、私に携帯の画面を向けてくる。
あ、スマホだ。いいなぁ。
いやいや、そっちはともかく。
その画面には、準決勝の後ダージリンさんから送られてきた画像が映し出されていた。
確かに口止めはしていなかったが、ここまで広がっていたとは……。

流石二枚舌……じゃなかった、英国風の学校の隊長さんなだけはある。
影響力が半端ない。
まぁ私も、そんなメールが流れてきたら興味津々だけどね！
ケイさんの表情を見れば、ワクワクが止まらない様な顔をしていて、未だに件の小野先輩を探している。
ごめんなさい、先輩。
私も心苦しい（大嘘）のだけれど、この善意（建前）の協力者のご機嫌のために、生贄（本音）になって下さい。
先輩ならあっちですよと、私は指差してグラウンドを照らしている車両の一つを示した。
「サンキュー、みほ！」
先輩の姿を確認したらしいケイさんは、私に一言礼を言うと先輩の方に足早に向かっていった。
先輩は不思議そうに相手をしていたが、スマホの画面を見せられて事情を察したらしく、私の方にジト目で視線を向けてくる。
おっと。私、知ーらないっと。
視線から逃れるようにそっぽを向いた私は、続々と積み込まれていく戦車の方へと進

み、忙しい雰囲気を演出することにした。
いやいや、ホントに忙しいからね。
ほんなこつばい？（本当のことですよ？の意）
Ⅳ号へ向かっていると、先輩からのメールが携帯に届いた。
何だろうか？
送り先：西住みほ
差出人：小野忠勝
件名：Ｎｏｎｔｉｔｌｅ
本文：
訴訟
……、『訴えは棄却されました』っと。
ポチポチと文面を打った私は、送信ボタンを押しパタリと画面を閉じた。

学園艦とお別れをした日、私達はかつて陸の学校だった施設を間借りして、転校先の振り分けが決まるまで待機する事になった。
しかもどういうわけか、男子の小野先輩も同じところで寝泊まりするらしい。
寝泊まりと言っても、先輩は外でテント生活をするとのこと。

どうやら角谷会長から、数日間は生徒会の一員としてここにいて欲しいと言われたのだそうだ。

それに加えて、戦車道の備品を可能な限り載せた回収車をここまで運転してきたらしく、グラウンドの一角にその車両が鎮座していた。

会長のことだ、何か考えがあるのだろう。

先輩もそれには同意見だったらしく、特に疑問をぶつけること無く言われたとおりにしたと言っていた。

「小野殿、テントの設営はおまかせ下さい！」

「秋山、別にこれは普通のテントだから。ミリタリー物じゃないぞ」

「まぁまぁ、アウトドア趣味があると女子力があるっていうじゃないですか。あ、お菓子食べます？」

「沙織さん、アウトドアと女子力に何の繋がりが……」

「……暑い」

「あはは、は」

夕方に差し掛かる時間帯、私達は先輩のテント設営を手伝う事を口実にして、時間を潰していた。

先輩も皆の押しに負けたらしく、既に諦めた様子でテントのパーツを手渡している。

ある程度の形が出来上がりつつあった時、またしてもあの騒音が空から聞こえてくる。

あぁ、どうやら『紛失した貴重品』が戻ってきたようだ。

受け取りのサインを、しなければならないな。

先輩や皆も気が付いたらしく、一斉に走り出し配達便の元へと向かった。

途中で他の戦車道チームメンバーも集まってきて、歩道橋の上から上空をフライパスするスーパーギャラクシーを見上げる。

いつの間にか優花里さんが無線機を持ち出しており、コックピットのケイさん達と交信を試みているらしく、何度か目盛りをいじりながら周波数をあわせていた。

その間、もう一度低空を飛行した飛行機は、預けていた戦車達をパラシュート降下させて飛び立っていった。

茜色にきらめく姿が、かっこいい。

流石サンダース、やることがアメリカンスタイルだなぁ。

優花里さんに渡された無線機でお礼を告げた私は、歩道橋の上から眼下に見える道路上の戦車達を眺めた。

で、誰がこればなおすとね？（片付けるという意味）

車道を封鎖した戦車と、辺りに広がるパラシュート、そして戦車を乗せていた金属製

の板が道路上にある。
少なくとも、小脇に抱えてというわけにはいかない。
町役場か警察から、苦情が来るんじゃないか。
早いとこ、移動させてしまわないと。
皆と同じように欄干に肘を乗せてパラシュート降下を見ていた小野先輩も、私と同じ考えなのか頭を抱えている。
「小野先輩、満タンでなくていいので戦車用のガソリンをここまで運んできてくれますか？」
「あぁ、了解。三式用の軽油もな」
「はい、お願いします」
流石に燃料を入れての降下はさせてないだろうから、必要になるはずだ。
これが空挺戦車であれば、また話が違ったんだが。
降下の影響で何処かにガタがきてないかも、確認しなくちゃならない。
寝泊まりする校舎に隣接する、グラウンドに運び込むまでに日が暮れてしまうし、そこから各車両を学園艦にあった設備なしに点検すれば……。
銭湯の営業時間が終わるまでに、間に合うかな？
最悪、シャワーも無しに日を跨ぐ可能性もある。

この時期に汗だくになった状態で、お風呂にも入らず一晩過ごすのは、女子高生として何か間違っている気がする。
もう、明日の午前中に回しちゃダメだろうか。
え、優花里さん。明日は明日でやる事があるから無理？
そんなぁ～、戦車触りたいだけだったら怒るからね。
ちょっと、なん目そらしとると？
こっちば、見んね。

辛うじて銭湯の時間に間に合った次の日、あんこうチームの私達はコンビニへの買い出しと、帰省の為のバスの時間を確認する為に外出しようと、角谷会長に許可をもらいに来ていた。
いつものことであるが、干し芋をかじっている。
それって、もしかしてご飯の代わりですかね。
「会長、戦車で外に出てもいいですか？　コンビニで買い出しと、バス停で時間とか確認しに行こうかと思ってるんですが」
「あー、そっか。転校手続きの書類、保護者のサインと判子がいるもんね」
「はい、それで歩きだと流石に遠いので……」

会長はうんうんと頷き、いいよーと許可を出してくれたが、何か思いついたのか人指し指をピンと立て、少し待つ様に私達に言った。
くるりと椅子を回転させ、ガラガラと移動していく。
窓際に設置されていた校内放送用のマイクを弄り、ある人物を呼び出す。
『小野ちゃーん、あたしんトコまで集合。よろしくー』
ピンポンパンポーンと、耳馴染みの音を響かせ会長はマイクを切る。
そして椅子を反転させると、私達に向かって待機するように伝えてきた。
「小野ちゃん来るまで、ちょっと待っててねー」
「小野先輩も帰省ですか？」
「ついでだし、一緒に行けばってね」
「はあ、私は構いませんけど」
皆はどうかと、後ろを振り返ってみれば特に問題は無いようで、反対は出なかった。
すると二分としないうちに、先輩が扉をガラリと開けて入ってくる。
此方に気付いた先輩は、片手を上げて挨拶し、私達も会釈を返した。
「会長、あの呼び出しはなかろうもん」
「まぁいいじゃん。それよりさー、西住ちゃん達がバスの時間とか見てくるって。一緒に行ったら？　どうせ、西住ちゃんとはルート同じっしょ」

「うーん、そうだなぁ。俺は船で帰るつもりだったから、そっちを見に行くなら一緒に行くかな。ついでに、チケット買えばいいし」

ん、んん？

今、何か変な事言わなかったか。この二人は。

先輩と私が、同じルート？

私は実家に帰省して、先輩も同じルートで帰省するってことは、つまり……。

先輩と私は、同郷って事で……。

「ええぇえっ!?　小野先輩、実家熊本なんですか!?」

「そうだけど、言ってないっけ。初めて顔合わせした時に、話してたと思ってたけど」

「伝えたはずだよー。転校したばっかりの頃だったから、同じ地元の人がいた方が話しやすいと思って紹介したんだし」

二人して何当たり前のことをと言わんばかりの表情で、私を見ている。

いやいやいや、聞いてな……聞いて……、聞いてたか？

あの時は会長に引き込まれた直ぐの頃で、裏方担当で手伝ってくれる人を紹介するって話だった気が……。

あれ？

「ちょっと、待って。今、思い出すけん」

「それはよかけど、時間あると？」
普通に、熊本弁で返された。
そう言われると、これまでもとっさに熊本弁が出た時に、先輩は聞き返してくること無く会話していた様な……。
「先輩、市内で待ち合わせするとしたら何処ですか？」
「角○ツクかダ○エー前」
あ、これは熊本ですわ。
市内と言われて、熊本市内を連想している辺り間違いないね。
「ていっても、市内に遊びに行くことはほとんど無かったけどね。交通費かかるし」
「へぇー、実家はどちらで？」
「○○、県北の方」
「あぁ、あの大きなお祭りがある。私、中学の時家族で見に行きましたよ。父が競技火縄銃大会に参加して、ウチの門下生が戦車流鏑馬をやるってことになって」
「隊長のお父さんも？　会場であったかもしれんね、俺も競技火縄銃の大会出てたし……。ま、まぁその話はまた今度にしよう、よか？」
どうやら、この話は避けたいらしい。
あのお祭りの何れかの競技会に参加するのは、あの地域の子供たちにとってある種の

憧れであったはずなんだけど。
参加条件が自分のお金で衣装や道具を用意することだから、お年玉を何年分か貯めてようやく参加できると聞いたことがある。
そのせいで大人も子供も、同じ条件で競い合うのだが。
偶に小中学生が上位入賞を果たしたりする大会なので、その辺は運営が上手くいっている証拠だろう。
最近は海外からの参加者も増えているらしく、先輩の参加していた競技火縄銃でも、骨董品のマスケット銃を持ち込み、空港で一悶着があったり無かったりだとか。
まぁ、スポーツチャンバラで足軽組頭とフルプレートの洋甲冑が戦うような大会なのだ。
その辺りのことは、許容範囲なのだろうなぁ。
ちなみに先輩の衣装は武者鎧なのだそうで、この数年で成長した分、サイズ直しにお年玉が消えているんだとか。
今度、写真みせてもらお。
「二人とも、何となくしかわかんないから。こっちに戻ってきて」
会長の言葉に、私の後ろにいた皆も同意するように頷いていた。
ちょっと、地元の話題で盛り上がりすぎたようだ。

私だって茨城ネタで盛り上がられても、蚊帳の外だろうから気持ちは分かる。
反省、反省。
その後、外に繰り出した私達と先輩は、移動中に発見してボコミュージアムで実に……、そう実に楽しいひと時を過ごした。
私は楽しかったぞ。
皆してなんだ、そのモノ言いたげな顔は。
ボコのきぐるみショーだって、手に汗を握る演出だったでしょうが。
え、手に握ってたのは携帯で、小説投稿サイトを見ていた？
ショーを見なさい！

今の私は、熊本へと航行する船の甲板でベンチに座っている。
船の周囲は完全な暗闇で、遠くに陸の灯りがポツポツと伺える。
結局、ボコミュージアムを堪能した私は、幼い同好の士との思いがけない遭遇に嬉しさを感じながらも、名残を惜しんでその場を後にし、当初の目的を果たしに行った。
先輩と私は同じルートで帰る事もあり、一緒にチケットを購入して、こうして船に乗っている。
学割も効いたし、廃校に伴うやむを得ない帰省でもあるので、領収証を取っておけば

後から文科省に請求できるとは会長の言葉であったので、このことでお小遣いが消えてしまうこともない。

他の皆も私達と同じように、実家に戻っているだろう。

先輩と私は、実家まで些か距離があることもあり、移動手段が飛行機でも新幹線でも無い為、船で一泊しながらの帰省となった。

年頃の男女が、二人っきりで実家に帰省する。

誤解を恐れずに言葉を並べるならば、このような内容となる。

ふへへ、やば。

ちょっと、にやけちゃった。

姉の悔しがる姿が、目に浮かぶようだ。

何も伝えず、姉の前に私達が現れたら……。

たいぎゃ、たまがるどねっ！（とても、驚くだろう。の意）

まぁ、一泊と言っても当然部屋は別々だ。

私は女性専用スペースの個室で、先輩は共用スペースで殆ど雑魚寝同然。

その為、面と向かって会話をしたいのなら、食堂かこうして乗客用甲板などに上がる必要がある。

そして私の隣にいない先輩は、何をしているのかというと……。

甲板の手すりに体を預け、姉と電話で楽しそうに話している真っ最中だ。
心なしか、普段の先輩よりも声が弾んでいるような気も、しないでもない。
ファック!!
同行者の女子高生放ったらかして、何やってんだ！
恋人との電話優先かよっ、くそ、健全じゃねーか！
一人寂しい私は、皆に現状をメールで伝えるも、帰ってくる文面は冷たい限り。
『残当』、『むしろこの場合、お邪魔虫なのは西住殿では……』、『泥棒猫、ダメ、絶対』、『まず、ご飯を頂くのです』……。
言葉を選んでいるのが優花里さんだけなんて、恋愛が絡むと友情は無かったことになる理論は、こんなとこでも適用されるのか。
そもそも華さんのご飯理論は、どういうことなの……。
それが先輩の暗喩ではないことを祈っていますよ、私は。
大体先輩がご飯なら、この場合おかずは私。
美味しく頂くのは誰だ、……姉か？
そうなると、それってさんｐ……おっと。
ここからは、有料放送のようだ。
モザイクが掛かって見えないぜ、ＨＡＨＡＨＡ！

一通り会話を楽しんだらしい先輩は、携帯画面を閉じると私の座るベンチへ近寄り、隣に座った。

両手には甲板に設置されている自販機で購入した缶ジュースが握られており、紅茶缶をこちらへと渡してくる。

どうもと一言お礼を言って、私は一口ほど含み喉を潤す。

先輩もプルタブを開け、缶を傾けていた。

「……？　隊長、何か怒ってない？」

「まさかぁ、それとも私が怒るようなことでもしたんですか？」

してないけど……と、言葉少なになる先輩を見て、私はクスクスと笑みが溢れる。

先輩もそれを見てからかわれたと気が付いたらしく、嘆息しながらも表情を崩した。

「隊長、明日は隊長を家まで送っていくことになったから」

「それは……、またどうして。予定では、熊本駅で別れるって話じゃ……」

「電話で言われたんだけど……西住さん、あぁお姉さんのほうの西住さんね？」

「それは分かってます」

「西住さんに妹を送ってほしいって言われてね、ついでに俺も西住さんに会いたいし」

あぁそう言えば、姉には帰省するってメールで伝えていたっけ。

少し照れたように語る先輩に、私はため息を吐き出しつつも返事を返す。

まぁ、理解してはいましたけども。
「……どちらがついでなのかは、聞かないことにしておきます」
「はは、は。そうしてくれると助かる」
すまんすまんと答える先輩に、私も仕方がないなぁという態度で大仰に示す。
それがどうやらツボに入ったらしく、先輩は声を出して笑っていた。
私も、自然と笑みが浮かんでくる。
その後、食堂の料理が意外と良かっただの、コインシャワーのシャンプーが別料金でムカついただのと暫く会話が弾んだ私達は、深夜になる前にそれぞれの部屋に戻り就寝した。

熊本港に降り立った私と先輩は、バスに乗り交通センターまで移動して、私の実家のある方面の路線を走るバスに乗り換えた。
最寄りのバス停で降りて、私の荷物を肩に下げる先輩の隣で先導しながら、久しぶりの懐かしい道を歩いている。
先輩は周囲をキョロキョロと眺めながら、私の案内を聞いていた。
転校の直前はこのルートを一人で歩いていたが、今は先輩と二人で歩いている。
あの頃は、こんな事になるなんて夢にも思わなかったなぁ。

小学生の頃、いつも姉と通っていた駄菓子屋さんも見えてきて、懐かしい気分だ。
先輩も駄菓子屋さんに興味を惹かれたようで、ラムネでも買っていかないかと私に訊いてくる。
「先輩、ラムネとか買うタイプなんですね」
「実家の近所に無くてさ、あんな感じの駄菓子屋。小学校の行き帰りのルートにも無かったし、あっても逆方向でなぁ」
幼い頃にお小遣いを握りしめて、当たり付きの棒アイスを姉と一緒に買っていた思い出が蘇る。
そういえば、当たり棒を私にくれたこともあったっけ……。
私が昔を懐かしみながら店先で待っていると、買い物を済ませた先輩が出てくる。
手には表面に水滴が浮かぶラムネが二つに、色々と駄菓子を購入したらしい紙袋が一つ。
「はい、これ」
「あ、どうもありがとうございます。いいんですか、貰っちゃって」
「このクソ暑い中、一人だけ飲んでるのは外聞が悪過ぎる」
「そういう事なら、遠慮なく」
店先の草臥れたベンチに並んで座り、ラムネ瓶の封を開ける。

ポンという音と共に蓋となっていたガラス玉が落ち、シュワシュワと泡が零れて瓶を持つ手を濡らしていく。

慌てて流れ落ちるラムネを口に運ぶ仕草が、隣の先輩とシンクロしていた。

それがなんだか堪らなく可笑しくて、目が合った私達は声を出して笑いだし、冷たいラムネを傾ける。

ラムネを飲み干し店先の蛇口で手を洗ったら、私達は再び歩き出す。

この駄菓子屋さんを過ぎれば実家はもうすぐだ、その証拠に犬の散歩中だった姉の姿も見えるじゃないか。

……、……うん？

ばっ!?　怖っ、何でおっとね！　（うわっ、怖い。どうしてそこに？の意）

「みほ、おかえり。小野君も、付き添いありがとう」

「え、あ、うん。ただいま、お姉ちゃん」

「久しぶり、西住さん。元気してた？」

「ふふ、昨日電話したばっかりじゃないか」

挨拶もそこそこに、先輩と姉の二人は楽しげに話し始めた。

足元では散歩を中断された西住家の忠犬・太郎丸がキャンキャンと主人に抗議しているが、当の本人は恋人との会話に夢中で気が付いていない。

あ、手を繋ぎ始めやがった。
握手じゃないぞ、姉の手に重ね合わせるような優しいヤツだ。
姉の方も、頬なんぞ染めやがってからに。
ちくしょう！
く、悔しくなんかないもんねっ！
私にだって、試合に勝てば肩を抱き合って勝利に涙する仲間が居るんだから！
う、羨ましくなんか……、うらやま……。
羨ましかっ！
心でハンカチを噛み締め、世の不平等を神に抗議して中指を立てていた私は、足元でへたり込む太郎丸と目が合う。
助けを求めるように私の方を見上げてくるが、私は力なく首を横に振るだけ。
ウチの姉がすまない。
いいってことよ。
想像上の会話が一人と一匹の間で交わされ、友情が生まれた気がした。
まぁ、気がしただけだったが。
「ところで小野君」
「どうかした？」

「私も、ラムネ欲しいんだが」
「……見てた？」
コクンと頷く仕草が、我が姉ながら可愛らしい。
これも恋する乙女の為せる技か……、いや素か。
「じゃあ、買いに行く？」
「うん」
うん、じゃないが。
駄菓子屋さんに歩き出した二人は、姉の方から腕を組み、先輩は照れたように反対の手で後頭部を掻くが、満更でもない様子で決して振りほどこうともしない。
これが噂の『当ててんのよ』か……、恋人繋ぎまでしやがって。
あぁぁぁー、あっついわー。
木陰にいるのに、暑いなぁっ！
太郎丸もリードが放されているというのに、主人の後をトコトコとついて行っている。
くそっ、忠犬め。
友情はどこに行ったんだ、友情はよぉ。
お気に入りだったブラッシング、してやらんけんね！

姉が冷たいラムネに満足した後、私達は実家の裏口から敷地内に入った。
正面は戦車道用の入り口も兼ねているため、どうしても立派にしつらえる必要がある。
しかし、そのようなものは住人が日常生活を送る上で過剰なのだ。
そのため、私達家族やお手伝いさんなどは、このような裏口を主に利用している。
大体、郵便受けや呼び鈴もこちらに設置しているのだから、玄関はむしろこっちだろうと思わなくもない。
案内されながら姉の隣を歩いている先輩は、予想以上だったのだろう、我が家の敷地内の様相を興味深そうに見回している。
「はあー、大っきい屋敷だね」
「そうだな、元々戦車道の流派を立ち上げる前は合気道や薙刀道なんかの、主に女性が門下生の道場をやっていたと聞いている。もちろん、師範や流派の長は代々西住家の女性が担っていた」
「うん、それで第二次大戦後に戦車隊を率いていた人がお婿さんになって、西住流戦車道が始まったんだよね？　お姉ちゃん」
「あぁ、帝国陸軍ではかなり名の通った指揮官だったようだ。身もふたもないことを

言ってしまえば、戦車道を始めれば国の補助金が潤沢に投入された事もあったし、護身術の道場も門下生が時代とともに減少していたのも、家業の転換を迫られた理由だな」

その名残として私や姉も、護身術を納めているわけなんだけど。

戦車道をやる以上、鍛えておかないと大怪我をしかねない事もあるのだ。

そういう時に、護身術の体捌きが怪我を防ぐのに役に立つ、……場合もある。

キューポラから上体を晒して、調子に乗って機銃弾がかすめるなんてことには、何の役にも立たないけど。

姉が母屋を指差して、あっちが生活空間だなんだと説明していると、ふすまの向こうから声がかかった。

「まほ」

「はい」

姉は何の事はない様子で答えているが、私は少しばかり憂鬱であった。

とっさに先輩の影に隠れるように動いてしまったが、そこは許して頂きたい。

かつての先輩の言葉を信じるならば、母はそれほど怒ってないのかもしれないのだが、黒森峰を飛び出して行き、更には寄せ集めの新興チームで古巣を叩きのめしてしまったのだ、私は。

はたから見れば、完全に本家と元祖で争うラーメン屋みたいな状態だ。

保守派の西住流と、革新派の西住流、次世代の派閥争いに見えないこともない。
まぁ、私と姉の間にわだかまりなど無いので、派閥もクソもありゃしないが。
「お客様かしら」
「はい、小野君が来てくれました」
またんかこら、どこの世界に『彼氏、家に連れ込んだぜ。ははは！』って、実の母親に言う女子高生がいるのか。
……ここにおったわ、忘れてた。
「あ、西住さんのお母さん。どうも、お久しぶりです。小野忠勝です、お邪魔させてもらってます」
なに普通に挨拶してんだよ、いや挨拶は大事だけどさ。
そこじゃねーよ、そういう事を言いたいんじゃないんだよ。
もうちょっと、私の微妙に揺れ動く繊細な気持ちを察してくれませんかねぇ。
……って、あ。ふすま、開いた。
「いらっしゃい、よく来たわね。……あら」
「た、ただいま。お母さん……」
「……えぇ、お帰りなさい。みほ」
……結構、普通だ。

いや、私だって叱責されたくて来たわけじゃないから、これで全然良いんだけども。
あ、これお土産です。
私は、手に下げていた大洗のおみやげである、さつまいもを使ったお菓子を渡す。
それにつられたのか、先輩も荷物から似たようなお土産を取り出し、差し出している。
私のものより若干グレードが高い点に、恋人の家族に渡す賄賂も兼ねていると思ってしまうのは、私の邪推だろうか。
「ありがとう、頂くわ」
二つとも受け取った母は、姉に向かって私と先輩にお茶を出すように言った。
母はまだ仕事が残っているらしく、後で床の間に来るそうだ。
はぁ、とにかく危機は一旦去った。
母屋の上り口で靴を脱いだ私達は、言われたように床の間に移動して、姉の入れた冷たい麦茶で喉を潤した。
先程のラムネもいいが、夏はやはりこれだな。
お土産のお菓子も、お茶請けとして頂く。
うむ、うまし。
お菓子の甘さを、麦茶でさっぱりと押し流す。
はぁ、このまま寝てちゃだめかな。

「みほ、今年帰省しないと思っていたが。何か用があったのか？」
グラスの麦茶を半分ほど消費し落ち着いたところで、姉はこのように切り出してきた。
先輩の肩に寄りかかり手を重ねる姿は、全く様になってないけど。
……写メを撮って、逸見さん辺りにでも送ってやろうか。
いや、反応が面倒くさそうだ。やめとこ。
「えっと、ね。この書類に、保護者のサインと判子がいるの」
私は、リュックサックからクリアファイルに挟んでいた転学願の書類を取り出し、見えるように机に置きツイっと滑らせた。
これがなければ、確かに姉の言う通り帰省してなかったなぁ。
まぁ先輩という同行者が出来たことは、痛し痒しといったところだろうか。
姉がその書類を手にとり、詳しいことを知っていそうな先輩にも問いただそうとした時、ふすまの外から声がした。
「まほお嬢様、戴き物のお菓子をお持ちしました」
「あ、はい。菊代さん、どうぞ」
床に膝をついてふすまを開けたのは、ウチのお手伝いをしてくれている菊代さんだ。
かなり前の事だが、本気で菊代さんが本当の母親ではないかと疑っていた時期があっ

たのだが、それは誰にも言っていない秘密である。
……実際、何度かお母さんと呼んでしまった事があるが、子供の失敗である。
許せ。
「みほお嬢様も、お帰りなさいませ」
「ただいま！　菊代さん」
「それで、そちらの方が……」
あ、忘れてた。
菊代さんには以前、先輩の事をメールで教えてたんだった。
そもそも、お茶請けはもうあるのだから、菊代さんが用意してくれる理由も無いのだけど。
……大方、肉食獣の獲物……じゃなかった犠牲者……でもないな、噂の彼氏を見に来たのだろう。
今も笑顔を絶やさないものの、興味深そうに先輩を品定めしている。
姿勢を正し、正座で菊代さんに正対した先輩は、頭を下げ自己紹介をする。
「初めまして、小野忠勝と申します。まほさんとは、真剣な交際をさせてもらってます」
「あら、これはご丁寧に。西住家で家政婦をしております、菊代と申します」
「はい、菊代さん。よろしくお願いします」

その挨拶に菊代さんも合格点を出したらしく、満足そうに頷いて挨拶を交わしている。

お茶請けを机に並べて、菊代さんは退出していった。

「いやぁ、家政婦さんがいる家って初めてで、緊張した」

先輩は胸をなでおろすように、安堵していた。

まぁ、そうそういないよね、家政婦さんていうかお手伝いさん。

身近にいるのとしたら華さんのお家だけど、知っているのは奉公人の源三郎さんだけ。

……奉公人って響きも、大概凄いけどね。

「？　そうかな」

「俺の実家は田舎の方の農家だから、家は大きいんだけど。家族以外は当然、家にいないよ」

「ふうん」

そこからは先輩の実家の話が話題になったが、私が口を挟める雰囲気ではなく、殆ど姉と先輩だけで話していた。

薄々分かってはいたが、居心地の悪さを覚えた私は、一度自分の部屋を見てくると伝えて部屋を出た。

母の仕事ももう暫く掛かるだろうから、三十分ほど部屋でボココレクションでも見てこよう。
あのまま二人を見ていても、砂糖を吐きかねない。
決して蚊帳の外がムカついたわけではない、ホントだぞ……。
自室でボコ分を摂取した私は、ホクホク顔で床の間への板張りの廊下を歩いていた。
さてもう少しというところで、ふすまの隙間から中を覗き込んでいる菊代さんを発見する。
その姿を見た私に気が付いた菊代さんは、しぃーっと人差し指を口元に当て、手招きするように私を呼んだ。
嫌な予感がしつつも、静かに歩み寄り菊代さんが覗いていた隙間に顔を寄せ中の様子を伺う。
ワォ、こりゃあマジか。
膝枕されてるぜ、――姉が。
（普通、逆じゃね？）
ボブは訝しんだ。
いや、訝しんだのは私だけど。
柱のある壁に背中を預け、足を伸ばした先輩の太腿に、姉の頭が乗っている。

先輩は姉の手にそっと左手を重ね、髪を梳くように頭を撫でていた。
ふにゃりと安心しきった表情で、撫でられる感触を堪能している姉。
何かボソボソと話しているが、ふすま越しの廊下では聞き取れない。
自由な方の手で先輩の頬に添えた姉は、何事か言ったようで、先輩は恥ずかしそうにしながらも渋々といった様子で頷いた。
顔は満更でも無さそうなのが、イラつくぜ。
隣の菊代さんも、あらあらと口元を手で隠しつつ、ニヤける頬を隠せていない。
どんなに年齢を重ねても、他人の恋愛ネタは大好物なのだな、女って生き物は。
ほんの数瞬目を離した隙に、先輩は上体をかがませ姉と唇を重ねていた。
おいおい、おいおいっ！
マジ大胆だなっ、恋人の実家で家人がいる時間帯に口づけをかますなんてよぉ！
求めたのは姉なのは間違いないから、情状酌量は認めてやるけどさ。
あ、姉の手がガッチリ先輩の後頭部に回ってるわ。
この場合、どちらにワッパを掛けるべきだろうか……。
菊代さんは菊代さんで、私の隣で静かにガッツポーズしてるし。
……相談した相手が間違っていたかもしれないな、そもそも西住家の関係者の時点でアウトだったかも。

二人のキスシーンを廊下から盗み見ていた私は、直ぐ後ろで同じように覗いていた母の存在に、中の二人が舌を絡ませ始めるまで気が付かなかった。
肩を叩かれた私は、心臓が飛び出さんばかりに驚き、あと少しで声が出そうになったが、静かにするようにと指を立てる母の姿に、かろうじて我慢することが出来た。
菊代さんは既に立ち上がっており、母に場所を譲っている。
知ってたなら教えて下さいよぉっ?!
長女とその彼氏の逢瀬を見た母は、仕方ないわねと言わんばかりの表情で中を覗いている。
そしてボソリと、恐ろしい事をつぶやく。
(我が娘にしては、大人しいわね)
大人しいって、何ねっ!?
自分は大人しくなかったとでもっ!?
あー、言わなくていいです。聞きたくないので!
小学校低学年の頃の授業参観で、一人だけギリ二十代だった理由なんてどうでもいいです、マジで。
二人の濃厚な接吻が途切れ、ようやく終わったかと安堵した私は、そろそろ入ろうかと思い始めた時、姉の『まだ私のターンは始まったばかりだぜ』と言わんばかりの行動

に身体が強張る。
膝枕から起き上がった姉は、先輩の太腿にまたがり正面から向き合う体勢で顔を近づけ始めたのだ。
流石の先輩もこれ以上のエスカレートはあかんやろと、姉の肩に両手を置き思いとどまらせる。
唇を尖らせ不満を露わにする、その表情が我が姉ながら可愛らしくも小憎たらしい。
もうさっさと入ってぶち壊してしまえば良いのではないか、私はそのように思い母の方を見やれば、表情を変えずに見守っているだけだ。
（お母さん、そろそろ止めたほうが良いんじゃ……）
（あら。みほは、二人を放っておけば、どこまでやるか気にならないの？）
（き、気にならなくは無いけど。見てること先輩にバレたら、恥かかせるだけでしょ！）
（自覚していないだけで、既に恥はかいているのでは）
（それはそれ、ですっ！）
仕方ないわねと、母は肩をすくめて見せ、喉の調子を整えると少しばかり声を張った。
「みほ！　床の間にいるように言ってたでしょう？」
はてなマークを浮かべる私に、クチパクで『トイレ』と伝えてくる。
あぁ、そういうことね。

意図を理解した私は、同じように声を大きめに出す。
「ちょっと、トイレに行ってたの！　お母さんは、仕事終わったの？」
中から、バタバタと足音が聞こえてくる。
母はよくやったとサムズアップして、私の働きを讃えてきた。
……、家ってこんなんだったっけ。
もうちょっと、厳格だった気がしてたんだけど。
数拍ほど置いてふすまを開けたら、先輩と姉はそこそこ常識的な距離を取って座っていた。
先輩は少しばかり動揺しているようで、母の登場に目をパチクリとさせながら会釈をしている。
姉の口元に光る涎は、指摘しないでおいてやろう。
一先ず全員が集まったということで、私は今回の帰省の目的を母に告げた。
母は最後まで口を挟まず聞いてくれて、手元の転学願の書類を眺めている。
「そう、廃校ね……。私は、撤回されたと聞いていたけれど？」
「えっと、そのぉ」
私は母の視線から逃れるように、先輩を見た。
すると、助け舟を出すように、代わりに説明してくれた。

はぁ、助かる。

母を前にすると、まだ、何ていうか固まっちゃうっていうか。

「文科省に約束を反故された？」

「ええ、簡単に言いますとそういうことになります。口約束は、約束ではないと言われました。廃艦を早めて、我々に反論の時間すら与えないつもりのようです。あちらは」

「そう……、先手を打たれたようね」

「はい……餓鬼だと思って、舐めたマネしやがる」

先輩は苦々しく思っていたらしく、少々似つかわしくない乱暴な言葉を口にした。

まぁ、私も気持ちは同じだけど。

「小野君」

「はい？」

そんな先輩に、母はたしなめるように語った。

「権威ある大人相手に噛み付いて、痛い目を見た事があったでしょう？　だから、そう簡単にそのような言葉を口にしてはいけません。貴方だけではなく、貴方の周囲の人間の評価を下げる行為でもある。自分を律しなさい、貴方ならできるでしょう？」

「……はい、すみません」

「よろしい」

先輩は叱られた子供のように、肩を縮こませた。
何やら母は、先輩の過去を知っているらしい。
姉の方を見てみれば、既に知っていたようで心配そうに先輩の方に視線をやっていた。
何だよ、私だけ知らないのか？
いや、詮索したいわけじゃないんだけど、放置プレイは止めてくれ。
「それで、みほ。貴方は、どこに転学するのかしら」
「そこは、まだ分からないかな？　一度、全生徒の分をまとめてから、茨城県下の学園艦に割り振るって聞いてるけど」
「……熊本には、戻る気は無いようね」
「うん、あっちで仲のいい友達もたくさんできたし。……私の戦車道も、見つけられたから」
「そう……」
母は、否定も肯定もしなかった。
昨年度まで、私を叱責していた頃とは大違いだ。
まっすぐこちらを見ている母に、私もまっすぐと見返した。
ほんの数秒のことだったが、母は視線からふっと力を抜くと表情を和らげる。

そして少し待つように行って、書類を持って退出していった。
はあー、緊張した。
私は後ろ手に畳に手をついて、リラックスした体勢で息を吐く。
「みほ、だらしないぞ」
「だって、お姉ちゃん」
「俺も緊張したよ」
「膝枕をしてあげよう、さぁ」
「それは遠慮します」
気が抜けた私達は、それぞれに足を崩してお茶で喉を潤す。
私はそこで、ふと気になっていた先輩の過去のことについて、聞いてみた。
大人に噛み付いたっていうのは、教師に楯突いたってことだろうか
「先輩、痛い目を見たって、何かやったんですか？」
「それは秘密だ、黒歴史を簡単に言うわけ無いだろ」
「私は知っているぞ」
姉が何やら、胸を張っている。
いや、いいからそういうの。
姉も知ってて先輩に対する態度が変わらない辺り、暴力沙汰や先輩に非があるという

内容では無さそうだが。
「西住さん、バラすのはだめだからね？」
「もちろん、私は口が堅いぞ。ただ……」
あぁ、この流れは知ってる。
トラップだ、獲物は先輩。
おいしく頂くのは姉、私は詳しいんだ。
「ただ？」
「帰る前に、一つ頼まれてくれたら、更に堅くなるんだけどなー」
チラッチラッと、先輩に視線を投げかける姉。
そうきたかと、顔を引き攣らせる先輩。
そのじゃれ合いにも似た攻防に、私は我関せずを貫きお菓子を頬張る。
あ、おいしーこれ。
母がサインと判子を押した書類を手に戻った時には、既に先輩のバスの時間が近づいていた。
正確にはもう少し余裕があるけれど、西住家から交通センターまでは少しばかり距離がある。
そして私も帰りの船に乗るために、一度駅まで向かいそこから熊本港へと行かなけれ

ばならない。

母や姉は泊まっていけばと言ってくれたが、もともと長居するつもりがなかったのだ。

母との事もあったし、それに二学期開始まであと少しほどの猶予しかない。

その間に、転学の振り分けやら引っ越しの手続きやらを済ませなければならない。

これは私だけではなく、全学年全生徒、更に言えば中等部や学園艦生まれの初等部の児童たち、そして男子分校の生徒もだ。

先輩も今日は実家に泊まり、明日または明後日中には大洗の町へ戻るだろう。

男子分校の高校生は先輩しかいないが、中等部や初等部の児童には男子が複数いる。

そんな中、生徒会でもあり年長者の先輩がいないのは、彼等男子生徒を不安にさせかねない。

普段から年齢関係なく集まって遊んだりしているような、仲間意識の強い関係が出来上がっているのだ、男子の皆は。

先輩もそんなことは口に出したりしないが、後輩の面倒を最後まで見るつもりのはず。

全員の転学が決まるまで、生徒会の一員として活動するのだろう。

交通センターで先輩と別れた私と姉は、姉の運転する戦車で熊本駅まで向かった。

熊本の人は戦車が普通に道路を走っていることに違和感が無いらしく、大洗のように二度見される頻度が少ない。

まぁ、大洗の場合は二十年振りに戦車道が復活したばかりなのだ。

見慣れていないのは、どうしようもない。

「本当に、駅までいいのか？」

「うん、そこからバスが出てるし。お姉ちゃんも、送ってくれなくて良かったのに。そうしたら、もう少し先輩と一緒にいられたでしょ？」

「ちゃんと送り届けると、小野君とも約束した。それに」

「それに？」

「小野君には、約束を果たしてもらった。だから私も、約束は守る」

そう言って、姉は唇を指先で撫でている。

実際には、キューポラにいる私からは見えないのだが、そんな感じのことをやっているのはこれまでの行動から丸わかりなのだ。

大体、交通センターで別れる時、先輩がそそくさと戦車を降りてバスに乗り込んで行ったのはどういうことだ。

先輩に手を振る姉の方も、何やら髪型が崩れて手櫛で直していたし。

え、なに？

凄かった？
なにが……いや、言わなくていいから。
これ以上は、年齢制限に引っかかるでしょっ！
（家族で見ていたら気まずくなる映画のワンシーンレベルなので、問題ないです。ｂｙまほ）

個人的なもやもやを胸に抱えながら大洗に帰還した私は、既に戻っていた皆の歓迎を受け間借りしている校舎へとたどり着いた。
聞くところによると、どうやら会長が不在らしく生徒会の河嶋さんや小山さんにも行き先を告げていないとのこと。
会長のことだから、全生徒の転学手続きで動き回っているのだろうと私は思っていたのだが、夕方になり戦車道受講者の非常呼集がなされた段階になって、それが思い違いであったことが分かった。
「皆、試合が決まった」
珍しく真面目な顔をして、話を切り出す会長。
文科省と取り決めを交わしてきたらしく、大学選抜チームと試合して勝利したら廃校は撤回されるという。

……おいおい本気かよ。
ウルトラC過ぎるだろうっ!?
大臣まで署名してんぞ、あの書類。
一介の高校生が、国まで動かしたってのか？
いや待て、高校戦車道連盟の署名は母のもの。
それじゃあ、昨日から今日にかけての短期間に、母や色んな人達を動かしたことになる。
なんでこんな人が、廃校が決まるような学園艦で、生徒会長してるんですかねぇ。
希望が繋がったことにひとしきり喜んだ後、生徒会と車長の皆が集まり作戦会議を行ったのだが、お先真っ暗な事態だというのには変化がなかった。
「三十輌、しかも社会人チームを破った大学選抜、かぁ」
そりゃ無茶だよ、こっちは八輌しか無いのだ。
『どっちのチームでやる？』って聞かれたら、もちろん選抜チームでよろしくって答えるね。
砲弾一発打ったら、三発乃至四発返ってくるとか、ムリゲーにも程がある。
……だからって、諦めるわけにもいかないが。
私は西住流から脇道を逸れているが、諦めるということは教わっていない。

なら、腹を括ってやるしかない。
「今のままでは、勝てません。しかし、この条件を取り付けることだって、困難だったはずです」
私は会長を流し見たが、いつものように飄々した顔をして椅子に背を預けている。
この流れも予定の内ってことか、敵わないな。
「普通は無理でも、戦車に通れない道はありません。戦車は火砕流の中だって、進むんです」
いや、実際は進ませないけどね、火砕流。
出来るのは、よっぽど覚悟完了した自衛隊員さんぐらいだよ、ホント。
「困難な道ですが、勝てる手を考えましょう！」
その私の言葉に、力強い返事が帰ってきた。
うんうん、気持ちで負けてちゃそもそも勝負にならないからね。
問題は、勝てる作戦を考えなきゃならないことなんだけど……はぁ、気合い入れてやるしかないか。
「西住ちゃーん、お疲れ。それと、ありがと。皆に喝を入れてくれて」
「いいえ、私だって不安ですし。自分のためにも、ですよ」
「ま、それでもだよー」

会長は私の背中を叩きつつ、干し芋を差し出してくる。
私はそれを遠慮しながら、自分の荷物が纏めてあるテントへと向かっていた。
既に試合会場のある北海道行きのフェリーが予約されているらしく、今日中にも出発しなければならないのだ。
熊本から戻って直ぐではあるので、リュックサックを持ち出す程度で終わるのが救いではあるが。
「そういえば、小野ちゃんは？　帰りは一緒じゃなかった？」
「先輩は、実家で一泊してくるらしくて……。戻るのは、早くて明日の夕方か夜だと」
「ふうん、それじゃ合流は試合会場でかなー」
電話しとかないとねと、会長は携帯を取り出し先輩にかける。
私はその場を離れて、テントの方へ。
自分の荷物以外にも、戦車だって準備しなければならない。
それに、普段は先輩が準備し運転する車輌もだ。
さぁて、忙しくなるぞ。

誰かあの七三メガネを割ってしまえ、私も参加する。
フェリーで北海道の港に降り立ち、試合会場に到着した私達は作戦会議を始めようと

していた。
そこに、紋付袴とスーツ姿の男性が現れたのだ。
あろうことか、殲滅戦にて試合を行うとのたまう始末。
ばっかじゃねぇーのっ?!
どこの世界に、三十対八で殲滅戦やるってアホがいるか。
……目の前にいたわ、くそったれ。
そこまでして、私達大洗女子学園の廃校撤回の可能性を摘んでおきたいのか。
いや、私達は今年度のサクセスストーリーの当事者と言ってもいい集団だ。
万が一の可能性さえ、無くしておきたいのだろう。
思惑が透けて見えるが、反論したところで事態は変わらない。
試合の運営も殲滅戦で動いているということは、既に出来レースの様相になっている認識なのだ、あちらは。
いけ好かないね、こんなやり口。
沈んだ空気の中、私達は一旦解散しそれぞれに明日の準備を行うことにした。
あのままの雰囲気では、憤りに駆られて短絡的な作戦しか立てられない可能性がある。
明日の早朝にでも、一度集まって最終的な会議を行えばいい。

私はそれまでに試合会場の地形確認と、作戦の草案を考えておかなければな。
満天の星空を臨む中、私は試合序盤のキーポイントとなりそうな高台の麓に来ていた。
地図で確認すれば、両チームにおける試合開始地点の凡そ中間地点にあたる。
ここを確保できるかどうかで、試合の流れが確定することは無いだろうが、態々相手に確保させて有利にさせる必要もない。
……確保したところでこちらは八輌、三十輌相手に囲まれたらジリ貧なのは変わらないか。
どうしたものやらと、星空を見上げていたところに角谷会長から声がかかった。
「苦労をかけるね、西住ちゃん」
「あ。会長……、いえ」
隣に並んだ会長も、私に倣うように夜空を見上げた。
「明日の試合、辞退してもいいんだよ？」
「まさか、それはありません」
学園艦の存続がかかっているのだ、それにここまで虚仮にされて、黙ったままではいられない。
「ここで引いてしまっては、道はなくなります」

「……うん、そうだね。そうだった」
会長は私の言葉に満足したらしく、口角を上げ頷いていた。
「それにしても、厳しい戦いだねー」
「私達の戦車道はいっつもそうだったじゃないですか、始めたときからずっと」
「アハハッ！　そうだったねー、ごめんごめん」
「それに、戦うのは私達だけではありませんから」
遠くから、あんこうチームの皆の呼び声が聞こえてくる。
そういえば、後から皆で迎えに来るって言ってたっけ。
「会長、小野先輩から連絡ってありました？　まだ、こっちで見てないんですけど……」
「あぁー、小野ちゃんね。電話して聞いたんだけど、こっちに着くのが朝になるって」
「じゃあ試合前は、ギリギリ顔合わせ出来ない感じですか」
「まぁね、なんか『お土産にサプライズがある』って言ってたけど、何だろうね。熊本のお菓子か何か？」
お土産にサプライズ？
食べ物だろうか、芥子蓮根なら鼻にツンと来るあれは、サプライズと言えなくもないけど。
馬刺しは生モノだし……、いきなり団子は言葉ほどのインパクトの有るお菓子ってわ

けでも。
うーん、いっちょん分からん。

試合当日、私は考えた末の作戦を思い返しながら、試合の挨拶に臨むため一歩一歩進んでいた。
結局、遊撃戦での各個撃破という結論に至ったのだが、それ以外の選択肢がないとも言えた。
基本的に戦車の質も、選手の練度もあちらが上。
更に数の上でトリプルスコアを付けられているんじゃ、手の打ちようが見当たらない。
古巣の黒森峰と戦った、あの決勝戦よりも分が悪いときた。
しかも殲滅戦だ、私達の得意戦術……というよりそれしか無い、フラッグ車斬首作戦が意味をなさない。
相打ち覚悟で『玉ぁ、取ったらぁ！』しても、その後滅多打ちに遭うだけでは、勝利は得られない。
「それではこれより、大洗女子学園対大学選抜チームによる試合を行います。……礼っ！」

審判長の蝶野教官が、試合の挨拶を始めてしまっている。
覚悟決めてたんだけど、いざ対戦相手を目の前にすると、プレッシャーでお腹痛くなりそう。
それもボコミュージアムで出会った、同好の士相手じゃなぁ。
私が腹を括り、挨拶をしようとしたその時だった。
『待ったぁっ!!』
どこからか、大音量のスピーカーを鳴らしながら乱入者が現れた。
しかもその声には聞き覚えがある、それもこの数日の内に聞いた相手だ。
黒森峰の戦車行進曲を大音量でかき鳴らし、どこかの防災無線用のスピーカーを取って付けたようなティーガー戦車とそのお供たちが、こちらに向かって走ってくる。
黒森峰に続くように、他にも続々と増援がやってきた。
サンダースに聖グロリアーナ、プラウダ、知波単、さらには継続高校まで。
私は零れそうになる涙を必死で堪え、その光景を見ていた。
だから……、そろそろその五月蝿いスピーカーを切ってくれませんか？
全部が全部スピーカーで鳴らしまくっているから、しっちゃかめっちゃかになってんだよっ!?
うるせーよ、限度があるだろ限度が！

ほら、審判長が青筋浮かべてんぞ。
１０式で無双し始めない内に、さっさとボリュームを下げて、な？
一先ず、試合の挨拶を終えた私は、増援に来てくれた姉を隣に引き連れて作戦会議用のテントへと向かう。
姉はどうしてか大洗の制服を着ているのだが、短期転校の手続きをした手前、大洗の生徒っぽさを出すために用意したのだそうだ。
周りを見てみれば、背伸びをしすぎた子供みたいなことになっているカチューシャさんも、ウチの制服を着用している。
いや、それは一旦脇に置いて、だ。
どうして増援に来たのか、その理由を知りたい。
「お姉ちゃん、助けに来てくれたのは嬉しいけど。どうして？　私すら、試合を知ったのは熊本から大洗に帰ってからだよ？」
「ダージリンから、通信が来てな。それで、皆で少しずつ応援を出そうということになったんだ」
（小野君の帰りに合わせられたから、一緒の時間が出来たし……ジュルリ）
「何か、言った？」
「何も」

嘘をつけ、今ヨダレばふいたろが。
そのニヤケ顔、やめーや。
はぁ、小野先輩の言っていたサプライズとは、このことだったのか。
確かにサプライズで、嬉しくはありましたけれども。
「それで、スピーカーは誰のアイデアなの？　蝶野教官にすっごく怒られたんだけど、何故か私が」
大洗チームの代表なのだからと、増援のしでかしたことも私の責任とされたのだ。
恨めしく見つめる私に、姉は普段通りの声色で答えた。
「あぁ、小野君の考えだ」
「はぁっ!?　なんで先輩がそぎゃんこつば……、たいぎゃうるしゃーたい、アレ」
「これは喧嘩なんだから、出会い頭に一発カマしてやったほうがいいと言われてな。他の学校の隊長にも伝えたら、何かノリノリで」
私は、頭を抱える思いだった。
考え方が、喧嘩っ早すぎる。昭和のヤンキーかよ。
そういえば先輩は、母の言ったことを真に受けるならばだが、権威ある大人に噛み付いた実績があるらしいからな。
……わざわざこんな時に、それを発揮しなくたって良かろうもん。

案外、先輩が高校から大洗学園艦に来たのは、そのあたりのことが理由だったりするんじゃ……。

問い詰めるのは、試合の後にしようか。

今は増援に来た皆と、最後の作戦会議をしなければ。

数が同じなら、勝機は充分にあるはず。

後はそれを、手繰り寄せるだけだ。

……あ、スピーカーは今のうちに外すように。

いいねっ!?　絶対ばいっ!!

『センチュリオン、Ⅳ号、走行不能！　……残存車輌、確認中……』

無線機から流れるその声に、私達は固唾を呑んで耳を傾けていた。

『……目視確認、終了。大学選抜、残存車輌、無し』

『大洗女子学園、残存車輌、一！』

皆で、顔を見合わせる。

やった……、やったんだ。

『大洗女子学園の勝利!!』

私達は、勝ったんだ！

狭い車内だというのに、私達は大声で勝鬨を上げるように声を張り上げた。
女子高生だとか、淑女がどうとか関係ない。
この喜びを表現するのに、そんなものは不要である。
勢いそのままに、キューポラから身を乗り出した私は、後方に鎮座するティーガーに向かって思いっきり手を振った。
私と同じように上体を晒している姉も、いつもよりかはどこか誇らしげな表情をして、手を振り返してくれる。
ハッチから抜け出した私達は、ティーガーの乗員とも肩を抱き合って勝利に湧いた。
「みほ」
「あ、お姉ちゃん！　やったよっ、私達!!」
「あぁ、よく頑張ったな」
「うんっ！」
私の肩に手を置いて、姉は勝利を讃えてくれた。
私達、大洗女子だけでは到底成し得なかった勝利であるが、その賛辞は素直に嬉しい。
「さて、そろそろ皆の所に戻ろう。ティーガーで牽引する」
「うん、分かった。皆に、言ってくるね」
姉の言葉に頷いて、私はⅣ号の方へと歩んでいく。

不思議と足取りが軽やかだ、浮かれた気持ちが抑えられないぜ、ウェヘヘ。

観客席と巨大観覧モニターのある広場に帰ってきた私達は、我が大洗女子連合チームの歓迎を受ける。

一車輌辺り四人から五人いると考えれば、この場には片方のチームだけで百二十人以上は最低でもいることになる。

こうやって砲塔の上から見ると、この人数は壮観だなぁ。

私の予想が正しいのならこの辺で、姉による小野先輩の探索が始まるのだが、今日は何やら大人しい。

ふと気になってそちらに目をやってみれば、携帯片手に双眼鏡を覗いていた。

……不審者がおる、これで性別が違ったら下着覗いてると思って、職質かけてもらうところだぞ。

すぐ隣りにいる逸見さんや乗員の皆さんも、訝しげな目で姉を見てひそひそと囁きあっている。

一体何を見ているのやら、気になった私もⅣ号の中から双眼鏡を持ち出し、姉の視線の先を観察してみた。

観客席の一角に、大洗女子の生徒達や関係者用の席が設けてある。

その最前列で何やら大洗の校旗を振り回し、号泣している若者がいた。
周囲には、小中学生と思われる少年たちが一緒だ。
……小野先輩、何やってんすか。
いや、嬉しいのは分かりますけど。
先輩、そういうキャラでしたっけ。
携帯で姉と話してるっぽいけど、その状態でちゃんと会話出来てます？
周りの後輩達に、揉みくちゃにされてますけど。
姉は姉で、何か感じ入るものがあったのか、携帯を耳に当てたまま静かに涙を流し、指先で拭っている。
ダメだこいつら、変なとこで似たもの同士じゃねーか。
双眼鏡を覗き込みながら溜め息をつく私を心配してか、優花里さん達が声をかけてくる。
その言葉に何でも無いよと答え、私達は戦車を選手用ガレージに戻すために、撤収作業を開始した。
この試合は学園艦の存亡を賭けた戦いではあったが、大会でも何でも無いのだ。
当然セレモニーなどの、表彰だって無い。
観客席の一般客も、既に帰り支度を始めているしね。

謎の感動で涙する姉も、見なくていいものを見てしまったような顔をした逸見さんに引っ張られ、ガレージに向かっている。
はぁ、やれやれ。

各校の車輌がガレージに集まり、自走可能程度に整備中の頃。
私と角谷会長は各校の主だった人物を訪ねて、今回の支援についてお礼を言って回っていたのだが、隊長格の人達は何処かに行ってしまったらしく、その場にいた選手達にお礼を伝えるだけに終わっていた。
「うーん、皆いなかったねぇ」
「はい。継続高校の人達にいたっては、もう帰ってしまったらしいですし」
「ちゃんとお礼したかったんだけどね」
「……お礼って、その干し芋ですか？」
「そりゃあ、もちろん」
会長は、片手に下げた紙袋の中身を見せてくれる。
いえ、美味しいですけどね、干し芋。
「それにしても、何処に行ったのやら」
「ですねー、隊長さんたちだけいないってのも、気になります」

「そう遠くに離れてることは、無いと思うんだけど……、あっ」
「何ですか？」
なにかを見つけたらしい会長は、私の方に顔を向けて人差し指を立て、シィーと静かにするように伝えてきた。
足音を忍ばせてとあるガレージの一角に向かうと、そこには壁の張り付いて中の様子を伺う、ケイさんやダージリンさん、カチューシャさん、アンチョビさん、そして西さんがいた。
……怪しい、街なかで見かけたら他人のふりするぐらいには怪しかった。
その怪しい隊長さん達を伺っていると、ダージリンさんに気付かれてしまい、手招きされた。
何となくだが、面白くなってきたぞと考えてるようなその表情に、私は不安でいっぱいだ。
こんな時ぐらい、紅茶手放したらどうです？
無理？　知ってた。
（あら、みほさんに会長さんも。奇遇ね）
（それはこっちのセリフだよ、ダージリン。ここで何してんの？）
（ちょっと、静かにっ！　そろそろ二人が動くよ！）

（ケイさん、二人って誰ですか？）
誰かを観察していたらしいケイさんに、私は疑問を投げつけるが、見てみなよと目線でクイッと示されるだけで、教えてはくれなかった。
カチューシャさんに至っては、片膝をついて壁の角から覗き込んでいるし、アンチョビさんや西さんは頬を染めて興奮気味にかぶりつきで誰かを見ている。
……薄々分かってはいますけどね、ここにいない誰かなんて容易に想像がつく。
しかも、華の女子高生が興味津々になるようなことなど、大抵決まっている。
会長と私は、覗き込んでいる皆の隙間から、件の人物たちを覗き見た。
やっぱり、姉と小野先輩だ。
向かい合って、何事か話している。
もう驚かなくなってきたよ、この程度のことじゃね。
キスでもハグでも、いくらでもしたら宜しいがな。
（ミホーシャ！　貴方のお姉さんって、恋人がいたの!?）
（え、えぇ。準決勝の直前には、お付き合いが始まってましたよ？）
衝撃を受けたらしいカチューシャさんは、静かにキャーキャーと盛り上がり、再び出歯亀に戻る。
アンチョビさんは何やらメモを取っているが、何に使う予定なのやら。

西さん、両手で視界を塞いでるようですけど、隙間開いてるのバレバレですから。

……まぁ、私もかぶりつきで見てるので、人のことは言えませんけど！

件の二人の会話は、そこそこの距離と周辺の整備に伴う騒音に掻き消されて、ほとんど分からない。

二人の仕草から、雰囲気を読み取る程度だ。

どうやら先輩の涙腺は、姉と二人になったことで再び張り切りだしたようで、静かに男泣きしている。

その様子を姉はオロオロしながらも、先輩の頬に手を伸ばし、涙の筋を拭ってやっていた。

（まぁっ！　まほさんも、大胆だわ）

（ワォっ！　まほ、そこよ。ブチュッと行けー！）

（まぁまぁ、二人のペースに任せようよ）

（角谷っ、それでいいのか！　お前んとこの男子だろ！）

（うわわわ、は、破廉恥な……）

（ちょっと！　知波単の、うるさいわよっ。聞こえないじゃない！）

あなた達も、結構うるさいし大胆ですよ。

それとケイさん、そのキスコール止めてね。

気づかれるでしょ！
涙を拭われた先輩は、姉の手をそっと掴みとり、ゆっくりと下ろした。
姉の方は何やら期待したような顔つきに変わったが、目論見は外れたらしく、額をくっつけ合うだけで終わる。
こっちは大興奮で、ヒートアップしてますが。
仕草一つ一つに息を呑み、はぁと溜め息をもらし、食い入るように注視していた。
額を合わせた先輩はボソボソと話しており、姉は静かに聞いていたが、一言何か返事を返したら、先輩らしくないやや強引な抱擁が姉を包んだ。
顔を紅潮させた姉は、突然のハグに動揺したのかワタワタと両手をばたつかせ、恐る恐る先輩の背中へと回す。
ふやけきった顔で先輩の胸元に顔を押し付ける姉の表情は、見たことがないほどに緩んでいて、……幸せそうだった。
……あーあ、何であそこにいるのが私じゃないんだろう。
自分の気持ちに気付くのが遅すぎた？
姉の方が魅力的だった？
……いいや違うな、私に勇気が無かっただけだ。
たった一歩、踏み出す勇気が。

（……西住ちゃん、ほら）
隣にいた会長が、ハンカチを取り出しこちらによこした。
どうやら、私は無意識に涙を流していたらしい。
お礼を言ってそのハンカチを手に取り、目元に当てる。
（……ありがとう、ございます）
（辛いね、恋敵がお姉さんじゃ、さ）
（会長は、知ってたんですか？　私が、その、先輩を……）
（んー、そうかもなーってぐらいには）
（……自覚した瞬間、失恋しちゃいましたけど）
会長は静かに私の背中を、慰めるようにそっと叩く。
私はハンカチで目元を覆い、声を殺して泣いた。
多分周りの皆にも、おおよその事情が伝わってしまっただろう。
姉とその恋人の逢瀬を前に、妹が泣いているのだ。
どんなに鈍い人だって、察しがつく。
それでも、涙は止まってくれなかった。
ポンポンと肩を叩かれた感触のあと、一人一人立ち去っていく気配がした。
慰めてくれたんだろう、それに一人にもしてくれた。

会長はまだいるが、私が心配なだけだろうな。
目元を覆っていたハンカチを畳み、ポケットへしまい込む。
（ハンカチは、洗って返しますから）
（いーよー、気にしないで）
ひらひらと手を振る会長は、腕を組んだまま壁に背を預けた。
どうやら、ずっと私の側にいてくれるらしい。
この面倒見の良さが、会長を会長足らしめてる、そんな気がした。
さて、そろそろあの二人にも、現実に戻ってもらわなければ。
（西住ちゃん、もういいの？）
（良くは無いですけど、帰りのフェリーの時間だってありますし。……それに）
（それに？）
（あのまま放っておいたら、肉食獣に食べられるとこまで、行くかもしれないでしょう？）
その表現に、会長は頬を引き攣らせつつも、それはまずいねと同意を示した。
賛同を得られた私は、もう一度目元を拭い、準備完了と言わんばかりに颯爽と歩きだす。
「二人共っ！　デートの時間はお終いですよ！」

「うわっ、隊長。いつからそこに」
「さっきからです。ほら、お姉ちゃんも黒森峰の皆が探してたよ」
「そうか、それならそろそろ戻ろう」
そんな言葉とは裏腹に、姉は名残惜しそうな顔を隠しもせず、何度も先輩に手を振りながら戻っていった。
「小野ちゃーん？　全く、皆が必死こいて整備してるってのに、恋人とデートとはいいご身分だねぇ」
「会長、悪かったって。戻るから、そんなに怒るなよ」
「怒ってるのは、私じゃないんだよねー」
チラリと私を見て、会長はそう言った。
そう来たか、いや確かに怒っていると言われたら、怒っているかもしれませんけど。
「隊長、すまん。この通り」
先輩は、私が本気で怒っていると感じたのか、さっと頭を下げている。
別にそんなことしてもらわなくても、いいんだけどなぁ。
おっと、ひらめいた。
私を失恋させたのだ、ちょっとぐらいのイタズラ、甘んじて受けて欲しい。
私は先輩の下げられた頭にそっと手を伸ばし、先輩の耳をつまみ上げる。

「イタタ、隊長。すまんって、そんなに怒ってたのか？」
「べっつにー、でもこのままガレージまで引っ張って行きますから」
「いやいやいや、それはマジ勘弁。恥ずかしすぎるんだけども！」
「会長？」
「いーよ、西住ちゃん。やっちゃって」
ほら、最高権力者から許可を頂いたぞ？
私は先輩の耳を引っ張り上げたまま、皆の待つガレージへと歩きだす。
先輩は痛そうな声を上げながら私に続き、そんな様子を会長は笑いながらついて来る。
こうして、私の高校二年生の慌ただしくも充実した夏が終わり、恋も終わった。

「お姉ちゃん？　先輩を放ったらかしたら、私が持ってっちゃうんだからね！」
「!?」
Ｅｎｄ．

ＩＦルート　みほ編
ＩＦルート　みほ編

「はぁー……、ダメだ。予算は補助金を当てるとしても、色々足りない」

ここは大洗女子学園艦の生徒会執務室、その最奥に位置する生徒会長執務室である。

後数日で高校三年になりそうな学年末のある日、私こと角谷杏はデスクに肘をついて頭を抱えていた。

つい先日、来年度終了を以て学園艦を廃艦とするとの通達を突きつけられ、咄嗟に返した言葉は、”戦車道で優勝すれば撤回してもらう”。

あの眼鏡をかけた役人も子供の戯言と受け取ったようで、含み笑いをしながらもそれを受け入れていた。

どうせ出来やしないと、そう思われているのだろうが、他に良い案があるわけでもない私達はその目標に向かって我武者羅に進むしかなかった。

なかった、のだが。

ここに来て、早くも暗礁に乗り上げつつあることを、私は認めざるを得なかった。

「そもそも戦車一台しか見っけてないのに、使用予定車輌を全て書き出せって無理があ

るよねー。昔やってた戦車道関係の書類もまだ整理終わってないから、どんな戦車だったかすら把握出来てないし……」

デスクの傍らに用意していた封を開けたばかりの干し芋をかじりつつ、私は固まった筋肉を解すように腕を回す。

あぁ〜ー、どうしたものやら。

ギシリと軋む少し豪華なデスクチェアでくるくると回りながら、考え込む。

戦車はいずれ戦車道受講者の人手を使って虱潰しに探すとして、それ以外の部分が固まってないんだよなー。

整備は自動車部にお願いする予定だけど、人数は片手で数えられる程度。

一日でも早く戦車に慣れてほしいからといって、毎日走り回らせるとしたら、それはそれで整備に負担がかかる。

演習するにしたって、演習場の整備にこれまた人手が要るんだ。

自動車部も、流石にショベルカーか何かの資格なんて取ってないだろうし……。

私や河嶋、小山だって戦車道以外にも通常の生徒会としての役割があるから、余裕がないのは分かりきっている。

大体、資格取るのにもお金かかるんだぞ。

そんな予算、大洗女子の来年度予算には入ってない……。

「……あ、ウチじゃなくて小野ちゃんとこの分校予算なら」
いや、流石に頷いてはくれないかな。
どうしても男女の人数差から、分校の予算は微々たるものになりがちだけど、数年に一度の色んな備品更新費用のために、毎年いくらか積立してるくらいだし。
でも、学園艦が廃艦になるって事情を知ってるのは、私を入れた生徒会の三人と学園職員の幹部、そして男子で唯一高校生の小野忠勝だけ。
学園の一般生徒には、最後になるかもしれない一年を憂鬱な学園生活で終わらせさせたくなかったため、未だ通達の決心が付かない。
それに、秘密を知っている人間は少ない方がいいと相場は決まっているものだ。
私はポケットの携帯電話を取り出し、小野ちゃんに電話を掛けた。
「あー、小野ちゃん？　わたしわたしー」
『……振り込め詐欺は間に合ってるんで、それじゃ』
「まぁまぁ、会長の角谷だよ。非通知じゃないんだから、分かってんでしょ？」
まぁ、この程度は軽いジャブみたいなもの。
取り敢えず、電話が出来るか尋ねてみた私は、彼が自宅の部屋で一人でいると確認出来ると、前置きもなしに目的を告げた。
「それでさ、小野ちゃん。ショベルカーとかその辺の資格、取ってくれない？　お金は分

校の積立予算から出して貰うように、私から言っとくからさ」
『はぁっ？　良いわけあるか。今年はようやく、サッカーゴールの中古フルセットに手が届きそうなのに。大体、個人の資格取得に学校の予算が出るわけ――』
「で、資格取ったら……戦車道で使う演習場の整備を手伝って欲しいんだ」
『……そういうことか。廃校になるってのに、来年度以降のこと計画しても無駄に終わっちまう。器具を用意しても、使う生徒が居ないんじゃなぁ』
ようやく、私の無茶な頼みの裏が伝わったようだ。
彼の言うことも、尤もだ。
小野ちゃんが高校から編入した時、彼が最初に生徒会の会議で発言したのは、このサッカーゴールのことであったのは強く印象に残っている。
何年も前から積み立てられている事が分かった彼は、女子の方の予算を少しで良いから回してくれと、女子オンリーの生徒会執行部に予算申請書を書いて寄越したのだ。
とは言うものの、彼と中等部の男子生徒を入れても十人にも満たない以上、とりわけ緊急性もないスポーツ用品の更新費用は出せなかったのだが。
女子の方だって、予算に余裕がないのはいつものことで。
今だってこうして足りない予算と人手を、男子分校の彼にお願いしているわけだ。
『それで？　資格を取るって言っても、普通免許だって持ってないんだ。その辺どうな

の？』
「小野ちゃん、誕生日って四月の頭でしょ？　それなら問題ないはず」
『だからって、直ぐに取れるわけでも無いだろ？　大体、自動車学校に通ってる間に新年度が始まるし、その後にショベルカー何かの資格取得。時間が足りないんじゃないか？』
うーん、ちょっと尻込みしてるな。
いきなり色々免許取ってというのも、かなり無茶なこと頼んでるのは自覚してるから、この反応は仕方ないけれども。
「ね、お願い。ここで躓いてちゃ、全国優勝だって夢のまた夢なんだ」
『創部一年目の野球部が、甲子園で逆転サヨナラ優勝するぐらいな』
「流石にもう少し、可能性があると願いたいね」
『……分かったよ、やってみる』
「ありがとう」
電話口で気にすんなと返す彼の言葉に、私はもう一度礼を言った。
それから直ぐ小野ちゃんと私は、会長執務室で予算申請に必要な書類を作成し、男子分校の教師に根回しを始める。
廃校関連の事情を知っていた教師は、まぁ仕方ないかといった様子で了承してくれ、

頑張れよと励ましの言葉を貰った。
先生方も、廃校撤回のために動いている私達を気遣っているのだろう。
ありがたいことである。
それから小野ちゃんが帰宅し、茜色の空に夜の帳が落ちた頃、私は一人残り戦車道関係の書類整理を行っていた。
いい加減、戦車道連盟に提出する書類を作らなければならない。
現物は無くとも、戦車道をやめた頃の二十年前に売り払わなかった戦車だけでも確認しておかなくては。
そうやって時間が流れていくと、デスクの上に置いてある転校願の書類封筒が目に入った。
一旦昔の資料を脇に追いやると、私はその封筒から証明写真付きの書類を取り出す。
（まさに福音とはこの事かな。熊本の黒森峰から、西住の名がやってくるとはね。気になってネットで調べてみたけど、去年の決勝戦のことがあってこっちに来るのかな？）
そう頭の中で情報をピックアップしながら、その書類を改めて眺める。
この子はもう戦車道なんて嫌なんだろうけど、それでも私達を率いて貰わなければこの学校に未来は無いんだ。
（あー、やだなー。態々嫌われ役なんて、やらなきゃならないなんてさ。やりたくないの

にやらされたって、本気で優勝しようなんて思うわけ無いってのに……。何か上手い事、やる気出してもらえないかなー）

「会長ッ！　今の男子の先輩って彼女いるんですか!?」

どうしてこうなった。

今日は、事実上の隊長に据えられた西住みほちゃんと、あれから何とか戦車道のスタートに間に合った小野ちゃんとの顔合わせの日。

黒森峰では女子しか居なかっただろうけど、ウチの大洗女子は選手の数すらギリギリの状況。

そこで、通常は居ないであろう裏方で手伝ってもらっている男子を、西住ちゃんに紹介しておこうとしたわけである。

基本的に授業中ではなく、主に放課後などを使って彼には動いてもらう事になっていると伝え、今後の円滑なコミュニケーションを期待してのことだったのだが。

いやはや、何とかしてやる気を出して貰おうとは考えていたけれども、こういう方向とは。

というか、鼻息荒いから、もうちょっと下がってくんない。

目つきヤバイよ、いっちゃってるよ。

戦車道女子って、皆こうなの？

「ま、まぁまぁ、落ち着きなよ西住ちゃん。お茶でも飲んで、まずは一服、ね？　あ、干し芋食べる？」

「お茶で良いです！」

あ、そう。じゃあ私食べよ。

西住ちゃんはぐいっと一気に呷るように飲み干すと、応接セットのテーブルにガツンと下ろす。

もうちょっと、優しく扱ってね。

「それで、さっきの話何ですが！」

「はいはい、小野ちゃんでしょ？　彼女がいるなんて聞いてないよー」

ほっとした表情を見せるが、言ってないだけかもしれないよと聞けば、どんな顔をするだろうか。

流石にそんなことはしないけど、無いとも言い切れないしね。

小野忠勝、唯一の男子高校生ということもあり、教師陣や大人達からの覚えもよく、本人の人当たりもその評判に違わない。

学業も、女子生徒を含めても上の中に何とか食い込めるだけの成績を維持しており、地元熊本の大学を進学先として希望しているらしい。

少ない人数であるが、男子の後輩からの信頼も厚く、彼の住む長屋には良く男子達が遊びに来るとは近所のお年寄りの言である。

惜しむらくは、間違いなくイケメンと呼ばれるほどの容姿を持ち合わせていないことで、女子生徒からは友達なら完璧と言われる始末。

まぁ、本人もそんなことは百も承知のようで、モテないことに悲観しているわけでもなく、大学に進んでからゆっくり考えればいいさと楽観視しているとのこと。

（小野ちゃんも、女子との距離がそれほど近くないのを、圧倒的少数派男子の処世術みたいに捉えているフシがあるからな―）

「じゃあ、好きな人がいたり……」

「あー、小野ちゃんとは知り合って丸々二年ぐらい経つけど、そういうデリケートな話はまずしないからね」

そこ、使えねーなって顔しない。

もう少し隠す努力をしろよ、会長だぞこっちはよぉ……。

無茶なお願いしてる側だから、追求したりしないけどさ。

「ま、小野ちゃんとどうなりたいかとかは、西住ちゃんの自由意思に任せるけど……。不純異性交遊は控えるように、一応ね」

「ええ!?　もうやだぁー会長、そんな気が早すぎですよぉ」

そりゃ、こっちのセリフだよね？
照れた様子でくねくねしてて、ちょっと引くわ。
戦車道を選ばなかった時に、生徒会室に呼び出した頃の彼女は一体どこへ行ってしまったのか。
武部ちゃんと五十鈴ちゃんに挟まれて、シュンとしてた顔から意を決して声を上げた姿に、言葉に出さないながらも私は少しばかり感動と嬉しさを感じていたのに。
ちょっと、私の感動返してくんない？
「西住ちゃーん、そろそろ戻ってきてねー」
「あ、はい。すみません、つい」
「どうせ戦車道のある日の放課後は、大体小野ちゃんもガレージにいるから。会長っていう立場上積極的な応援は出来ないけど、そこで上手い事チャンスを活かしてね」
「はい！」
「それと、自動車部と一緒に整備の方でも手伝ってもらってるから、整備に関することも色々教えてやって欲しい」
「分かりましたっ！　手取り足取り腰取りですね！」
最後のは、聞かなかったことにするよ。
なんだろう、この小動物系を彷彿とさせる見た目の裏に潜む肉食獣は。

戦車道は、良妻賢母を育成する伝統武道ではなかったのか。
育ってねーじゃん、西住流さんよ。
それとも、この娘が特別なだけか？（※西住家では大人しい方でした）
私は内心溜め息を吐きつつも、やる気が出てきたのは良い事だとして、自分自身を誤魔化すという高度な柔軟性を持った臨機応変な対応を取ることでお茶を濁す。
（小野ちゃんには悪いけど、他の皆にもこのやる気が伝播していってくれれば御の字かな）
それから、細かい確認事項を確認しあった私達は、次の日から始まる戦車道の授業に備えるために、日も暮れないうちに解散した。

訓練の日々が続く中私は、西住ちゃんの押しの強さに戸惑いつつも、適当にあしらう事もできない小野ちゃんの姿を横目に見ながら、忙しくも充実した毎日を過ごしていた。
つい先日も突然のお願いにも関わらず、聖グロリアーナ女学院という日本高校戦車道界でも指折りの強豪と評されるチームと練習試合が組めたのだ。
残念ながら、西住ちゃん率いるⅣ号戦車以外は大した活躍も見られなかったが、チーム各員はその敗北から何かを感じたようで、確実に良い方向へと意識が切り替わったと

確信できるに至った。
見るからに練習に対する姿勢が変わったのは、本当に良かった。
廃校の事情を知らない彼女達に、真実を未だ明かせずにいるのは心苦しい話だけど、自分達の勝利如何で学園艦の運命が決まるなんてプレッシャーを感じながら、戦車道をやって欲しくはない。
どういう結果になろうと、皆には楽しい思い出として残って欲しい。
私が練習試合の内容を振り返りながら、会長室で全国大会の抽選日の日程を確認していた、その時だった。
「会長、小野です」
「んー、どうぞー」
ノックの音が聞こえたかと思うと、何か用事でもあるのか小野ちゃんが作業着姿で入ってきた。
どうも落ち着かないらしく、そわそわした様子で応接セットに座る。
デスクに向かっていた私は、自分の肩越しに外を見やれば既に薄っすらと星が見える時間帯。
もうそんな時間かと思い、そんな時間までこうして作業着姿で頑張ってくれている小野ちゃんに感謝しつつも、突然現れ可笑しな様子を見せる彼に疑問が湧く。

（ここまで落ち着かない小野ちゃんも珍しい、何か高い部品でも壊したのかな？）

戦車道関係であれば補助金が出るからそんなに気にしなくても良いのだけれども、まぁ話ぐらい聞いてあげようじゃないか。

取り敢えず私は備え付けのお茶を淹れると、彼の前に置いた。

「それで？　何かやったの？」

「ありがとう……、いや俺が何かしたってわけじゃないんだけど」

「歯切れが悪いねぇ、ほら言っちゃいなよ」

何やら言おうか言うまいか逡巡しているようで、私が先を促すと大きく息を吐き出しこう言った。

「西住隊長に……告白された」

「ブフォッ!?」

「きったねぇ!?」

鼻から飛び出たお茶が、テーブルを飛び越え作業服に掛かり、ティッシュペーパーで拭う小野ちゃん。

私は鼻がツンとするやら何やらで、いまいち状況が飲み込めていなかったが、自分も汚れを拭き取った頃にはようやく彼の言葉が飲み込めた。

「マジで」

「……おう」
「で？」
「で？　って言われてもだな……」
「返事はどうしたってこと！」
事前に西住ちゃんがそういう気持ちでいると把握していた私だけど、だからってこんなに早くとは思ってもいなかった。
もう少しこう、半年ぐらい時間掛けたり卒業間近だったりと、何やかんやで西住ちゃんの決心が付くのは先だと思っていたからだ。
実際、顔合わせをしてそんなには経ってないはず……。
いや、放課後と土日の自主訓練等を考えれば、最低限人となりを把握できる時間はあったのか？
……西住ちゃんは最初からあの調子だったしな、何か生粋の戦車道女子を引きつけるフェロモンでも出てるんじゃなかろうか。
「返事は、まぁその……。オッケーした感じ？」
「へぇ？」
私の面白がるような表情に、小野ちゃんも眉を寄せ、いや違うんだと聞いてもいない話を並べ立て始める。

「いやいやいや、ぶっちゃけるとね。あんな可愛い子にあれだけ想われてみてよ？　男なら誰でもコロッといくから」
「ふうん？　ウチの女子生徒も、それだけ押しが強ければ小野ちゃんをゲット出来たのにねぇ」
「バカ言え。半年に一回は女子から呼び出しがあったけど、全部罰ゲームだったぞ。『すみません、これ罰ゲームなんですぅ。貴方のことは嫌いではありませんけど、好きでもないんですぅ。ごめんなさーい』だってよ。それを聞いた俺はどうすれば良いんだよ……」
器用に声真似をする小野ちゃんは、どこか疲れた様子を見せており、哀愁が漂っている。
それは、ホントご愁傷様です。
風の噂で耳に入ってきてたのは覚えているけど、確かにそれはキツイなぁ。
「中には、本気だった娘もいたかも知んないよ？」
「それならそう言えって話さ。言葉にしなきゃ伝わんねぇよ、当たり前だろうが」
「ま、その意見には私も賛成するけどね」
廃校の通達があったことを、生徒達に告げていない私には耳の痛い話である。
一体いつになれば、ちゃんと公表するつもりなのだろうか、私は。

腕組みをして考え込む私の姿が気になったようで、どうかしたのかと小野ちゃんが尋ねてくる。

それに何でもないよと返し、私は暗い考えを一旦は打ち消した。

先送りになるけど、仕方ない。

せめて戦車道全国大会が終わるまでは、公表は控えたいなぁ。

チームの皆に、余計なプレッシャーを背負わせるわけにはいかないしね。

「それでさー、なんて告白されたの？」

「……言わなきゃ、ダメかね」

「いや、私としてもね？　これまで女っ気のなかった小野ちゃんを射止めた、西住流告白術を知っときたいなって。あくまでも、そう、今後の参考までに」

嘘を言うなという視線を私は軽く受け流し、さぁさぁと先を促す。

一際大きく息を吐きだした小野ちゃんは、誰か来ないかどうか扉の方を一瞥すると、顔をこちらに向けて話し出す。

「本人の名誉のために、ここだけの話だぞ？」

「分かってる分かってる」

『お付き合いを前提に結婚して下さい！』って言われてさ……。いや、テンパってるのは西住隊長の態度から分かってたし、気持ちは十分に伝わってきたけど。せめて逆にし

てくれって言いそうになったわ」
「おう……、一段飛ばしどころじゃないね。初手王手は真似出来ないなー」
　これには私も苦笑い。
　いやしかし、目の前にまんまと釣り上げられたのがいるもんな。
　小野ちゃんみたいなタイプには、意外と効くのだろうか。
　試す予定は今のところないから、どうなるかは分からず終いだけど。
「ほら、続き続き」
「まだやんのか？」
「ここまで来たら、最後まで言っちゃいなよ。で、どういう返事したわけ？」
　その光景を思い出し恥ずかしいのか、そわそわした様子の小野ちゃん。
　こんなに面白い彼は、はっきり言って初めてである。
「『結婚は一先ず置いておいて、お付き合いの方からよろしく』……って感じで最後は握手、みたいな」
「ひゅー！　ハッピーエンドは嫌いじゃないよ、私は」
「茶化すのやめーや。最初から断ってないわ」
　口笛を鳴らし、ニヤニヤとした私の顔がムカつくのか、小野ちゃんは悪態をつくがそんなことされても、私からは笑い声が洩れるだけ。

小野ちゃんとしても、バカにされてるわけじゃないと分かっているからか、私を制するような真似はしてこなかった。
それから、三十分ほど小野ちゃんを茶化した私は、彼が来るまでやっていた仕事を放り投げ、帰宅の途につく。
全国大会の抽選会は、どうせもう暫く先なのだ。
今日ほんの少しぐらいサボったって、誰も文句は付けやしないさ。
そうして、少しばかり軽くなった気持ちを胸に、寮に帰ったのだ。

「会長！」
「何だい、西住ちゃん」
「学園生徒があまり立ち寄らない薬局って知ってますか？　一応、万が一のためにゴムを――」
「自　重　し　ろ」
間髪入れずにチョップを叩き込んだ私を、誰も責められやしないだろう。
不純異性交遊発覚からの、大会出場停止廃艦コンボはマジでやめろ。

そんな不名誉な終わりは、ごめんだよっ!!
おう、忠勝。
お前の嫁の手綱は、ちゃんと取っとけよ!?
分かってんのか!?
おいっ！